

第38回全日本総合選手権大会

大波乱の大会、男女とも初優勝

(男子)本田技研鈴鹿　(女子)東京女子体育大



第38回全日本総合選手権大会は、12月25日から28日までの4日間、前半の2日間を駒沢体育館と駒沢屋内球技場、そして後半の2日間を青山学院記念館で開催した。

今年度から参加チーム数を若干減らし、男子16、女子14のチームが熱戦を展開、学生チームの活躍などで盛り上げた。

男子は、今大会でV8を目指す湧永製薬が順調に勝ち進み、決勝に進出。一方、復活を目指す大同特殊鋼は1回戦で大阪体育大の前に敗退、1年間のブランクの大きさを感じさせた。大阪体育大は、つづく2回戦でも大崎電気を終始苦しめ、惜しくも1点差で敗れたものの、最近低迷をつづける学生チームの中で気を吐いた。結局、決勝で湧永と対戦することになったのは、11月に終了した日本リーグで見事逆転優勝を飾った本田技研鈴鹿であった。

決勝戦は、初優勝を目指す本田の気迫が立ち上がりから湧永を上回り、3点を連取、湧永もディフェンスを建て直してよく反撃したが、遂にリードを奪うことが出来ず、V8の夢は絶たれた。本田技研鈴鹿は、これでリーグにつづいて総合も初優勝を飾り二冠を獲得した。

女子は波乱の連続だった。まず、東京女子体育大が、韓国からの二選手の活躍などでインカレにつづいて好調な動きを見せ、大和銀行、大崎電気と撃破、準決勝では前年の覇者でリーグ優勝の立石電機山鹿を圧倒、堂々たる勝ちっぷりで決勝に進出した。

一方のブロックからは、リーグ二部のシャトレーゼが大健闘、ブラザー工業、ジャスコ、日本ビクターといずれもリーグの上位チームを倒して決勝に勝ち進んだ。

決勝戦は、女子の試合には珍らしい点の取り合いとなった。李京姫を中心としたセットプレーで得点するシャトレーゼ、速攻と早いボール回しからサイドで得点する東女体大の打撃戦。結局、攻撃力に一歩勝る東女体大が、一時二人退場というピンチを切り抜け、終盤力尽きたシャトレーゼを一気に突き放した。シャトレーゼは、李京姫一人に頼りすぎ、攻撃の幅がなくなってしまった。

東女体大の優勝は、全日本総合史上初の学生チームの優勝となった。

男子 本田技研鈴鹿、湧永のV8を阻む

1回戦

湧永製薬37（22―11／15―4）15自衛隊呉

[戦評] 緒戦のためか、前年度優勝の湧永もコンビネーションが合わず、玉村の単独ゲットでゲームをリードしていたが、10分過ぎからマイペースでゲーム展開、一方自衛隊呉はポストプレーで攻撃するが、湧永の好守で得点することができず、15―4の大差で前半を終了。

後半、自衛隊は児玉のミドルシュートでゲットをするが、速攻、ポストプレーと多彩な攻撃を展開する湧永に歯が立たず、37―15の大差で湧永が勝利をものにした。（福田）

	〔自衛隊〕	得	〔湧永〕	得
GK	一二	0	大城	0
	須堯	0	井藤	0
FP	山先	2	生駒	1
	寿賀	0	玉村	8
	塩見	0	志村	3
	和田	3	中川	3
	西川	0	内田	5
	児玉	7	荷川取	1
	池田	2	奥田	5
	岡田	0	楢原	3
	利光	1	酒巻	4
	山根	0	河原	4
PT		(2)		(0)
		15		37

（審・上久保、北井）

栃の葉ク33（15―15／18―11）26中村荷役

[戦評] 立ち上がりより栃の葉ペースのベーム展開で、中村荷役が福士を中心に中盤より追い上げ、15分には8―8と追いつく。しかし、栃の葉の多彩、かつ積極的な攻撃を防ぎ切れず、栃の葉の快勝の一戦であった。（大原）

	〔中村〕	得	〔栃の葉〕	得
GK	高橋	0	高橋	0
	末次	0	岩下	0
FP	三尾	2	川田	0
	塚田	2	岸	0
	岡部	0	中山	2
	福士	12	山本	1
	大木	0	小西	4
	下戸成	2	滝口	11
	小野	2	武井	7
	吉田	0	名嘉	4
	長原	5	薄井	4
	北	1	杉浦	0
PT		(1)		(2)
		26		33

（審・島田、後藤）

三陽商会27（14―10／13―11）21国士館大

[戦評] 力強い1対1の技術から突破口を見つけようとする三陽に対し、きれの良いフットワークと巧みなコンビネーションの国士館大は粘り強く食い下がってゲームを進行した。

三陽は20分過ぎ5点差をつけ、このままリードを保つかと思えたが、あきらめずに国士館は追い上げて1点差で前半終了。

後半、国士館のプレーに期待されたが、やや攻めあぐむスキをついた三陽は楽々と加点し、絶えずゲームの主導権を握り快勝した。（北井）

	〔国士館〕	得	〔三陽〕	得
GK	大崎	0	宇田川	0
	斉藤	0		
FP	大谷	1	関	1
	谷井	0	清家	4
	吉井	3	田口	2
	斉藤	2	瓜田	0
	本村	7	砂川	5
	菅沼	7	山口	7
	福田	1	実方	6
	大刀川	0	安藤	1
	猪瀬	0	河村	1
	長洞	0	吉原	0
PT		(3)		(4)
		21		27

（審・川島、森）

日新製鋼33（16―8／17―12）20境港ク

[戦評] 高木、西山の両エースをかかえる日新は、立ち上がりからリズムに乗った攻撃で着実に得点を重ねる。対する境港クは、日新のあたりの強いディフェンスをなかなか崩せず、田中、児玉らの速い動きで応戦したが及ばず、日新が33―20で勝利をものにした。（後藤）

	〔境港ク〕	得	〔日新〕	得
GK	桑本	0	西川	0
	渡井	0	谷	0
FP	西村	0	森	3
	望月	2	武田	2
	荒木	1	西山	7
	田中	6	甲斐	2
	児玉	4	藤井	5
	古賀	4	日野	1
	小沢	1	堀田	4
	六車	1	一ノ瀬	2
	仁志	1	高木	7
			池田	0
PT		(1)		(1)
		20		33

（審・島崎、井上）

本田技研鈴鹿23（11―7／12―8）15大同ク

[戦評] 前半、日本リーグを制した本田が、全日本総合も制する勢いで確実に速い攻めで加点するも元ナショナルプレーヤーでかためた大同クラブも持ち前のチームプレーで粘り強く攻め、ベテランの味を十分に発揮し善戦する。

後半に入ると大同クに疲れが出はじめ、本田の速攻の前に点差が開く。終始余裕を持ってゲームを進めた本田の勝利であったが、最後までゲームを捨てなかった大同クの健闘が讃えられる。（川島）

	〔大同ク〕	得	〔本田〕	得
GK	柳川清	0	大畑	0
	小野	0	橋本	0
FP	柳川実	2	三本松	0
	藤中	6	田野	1
	加藤	1	立木	4
	中井	2	尾上	4
	松原	1	内藤	5
	大原	2	栗屋	0
	更谷	0	吉山	3
	清崎	0	田口	0
	桑幡	0	山本	5
			平子	1
PT		(1)		(1)
		15		23

（審・中本、福田）

日大29（13―12／16―14）26三景

[戦評] 前半、両チームともにディフェンスが悪く、点の取り合いとなった。後半に入っても同様の展開となったが、シュートを確実に決めた日大が、残り5分で勝負を決めた。（菅野）

	〔三景〕	得	〔日大〕	得
GK	中村	0	木明	0
	北川	0	富田	0
FP	田畑	4	堀川	0
	近藤	3	白坂	4
	高橋	0	吉見	2
	福永	0	野平	7
	田村	1	春木	6
	金木	10	大薮	0
	日越	0	雨宮	5
	山田	2	小河原	5
	大谷	0	渡辺	0
	郡司	6	山田	0
PT		(5)		(0)
		26		29

（審・北山、大原）

大阪体大24（14―8／10―10）18大同特殊鋼

[戦評] 立ち上がり大同が高村のミドルで先行すれば、すかさず大体大が楠本のカットインで得点する。10分過ぎより大体大は、ポスト、スカイプレー、速攻などで加点し、リードを奪うが、前半終了間際、大同は3連続得点で同点とし前半を終了する。

後半に入り、立てつづけに大体大が3連続得点し、ゲームの主導権を握り、その後も着実に加点する。大同は、相手ディフェンスの早いチェックより1対1も思うにまかせず、また、シュートにしても不十分な体勢が多く、GK徐の

	〔大同〕	得	〔大体大〕	得
GK	上村	0	大谷	0
	秋吉	0	徐	0
FP	田中	2	村上	0
	内藤	0	楠本	2
	高村	6	福村	1
	小野	1	山村	5
	市川	0	大塚	4
	中本	2	渡辺	0
	蒲生	5	谷口	6
	横浜	1	真田	0
	海江田	0	西岡	5
	名取	1	梅基	1
PT		(0)		(2)
		18		24

（審・岡本、清水）

好守にあってなかなか得点しきれなかった。（中本）

大崎電気35〔1718—1112〕23沖縄教員

【戦評】前半、大崎はセットプレー、速攻、サイド、ポストなど多彩な攻撃で着々と加点した。沖縄教員も走力を生かし、高良、東江などの巧いシュートで大崎に食らいついていった。

後半、沖縄教員は黒島がよく頑張ったが、大崎の打点の高さにどうするすべもなかった。（不明）

	〔沖縄〕	得		〔大崎〕	得
GK	新垣	0	GK	岡部	0
FP	黒島	8		矢内	0
	宮城	1	FP	松岡	7
	新垣	0		武田	1
	高良	4		首藤	8
	上原	0		中田	1
	大城	0		山本	5
	新里	0		越迫	0
	喜舎揚	2		菅田	2
	高良	4		星野	1
	東江	4		大和田	2
				宮下	8
PT	(5)	23	PT	(1)	35

〔審・　〕

2回戦

湧永製薬26〔1115—1010〕20栃の葉ク

【戦評】堅いディフェンスと幅のあるオフェンスで湧永が徐々に引き離そうとするが、栃の葉クラブも武井のロングシュートなどで反撃し、前半を5点差で終了。

後半、速攻とフォーメーションプレーで湧永がゲームの流れをつかみそのまま押し切った。

栃の葉クの健闘が光った試合であった。（菅野）

	〔栃の葉〕	得		〔湧永〕	得
GK	高橋	0	GK	大城	0
	岩下	0		井藤	0
FP	川田	0	FP	生駒	7
	岸	0		玉村	6
	中山	1		藤本	0
	山本	0		志村	2
	小西	1		中川	2
	滝口	6		内田	0
	武井	5		山本	2
	名嘉	3		奥田	5
	薄井	4		楢原	1
	新開	0		河原	1
PT	(2)	20	PT	(1)	26

〔審・島崎・井上〕



大阪体大が大健闘、１回戦では大同特殊鋼を倒す

日新製鋼25〔1015—1011〕21三陽商会

【戦評】開始から日新はGKの好守と三陽のシュートミスに乗じて速攻と安定した攻撃で着実に加点する。対する三陽は、20分過ぎ、日新の退場を機に2点差まで追い上げるが、西山の強烈なシュートに差をつけられ前半を終了。

後半に入っても確実に得点する日新に対し、三陽も必死に追いすがったが、連続得点できず、前半の差がそのまま勝敗に結びついた。（北井）

	〔三陽〕	得		〔日新〕	得
GK	宇田川	0	GK	西川	0
FP	関	1		森田	0
	清家	5	FP	森	2
	田口	3		西山	7
	瓜田	0		中井	4
	砂川	3		藤斐	2
	山口	5		日野	1
	実方	4		堀田	4
	安藤	0		一瀬	0
	河村	0		高木	5
	吉原	0		野中	0
				池田	0
PT	(0)	21	PT	(4)	25

〔審・北山・大原〕

本田技研鈴鹿31〔1714—9 8〕17日大

【戦評】前半、本田技研は開始早早5連続得点で日大をリードし優位にゲームを展開、両チームのGKの好守もあり引きしまったゲームで一進一退の展開で14—8で前半終了。

後半に入ると、日大も本田のペースをつかみ、ディフェンスもよくなり同等の試合をしだしたが、それも立ち上がり10分位まで、15分過ぎになると日大にパスミス、シュートミスが続き、試合巧者の本田技研の一方的な試合ペースで終了した。（島崎）

	〔日大〕	得		〔本田〕	得
GK	木明	0	GK	大畑	0
	富田	0		橋本	0
FP	堀川	0	FP	三本松	1
	白坂	0		田野	4
	吉見	3		立木	3
	野平	3		尾上	1
	春木	0		内藤	5
	大薮	5		栗屋	5
	雨宮	1		吉山	4
	小河原	2		田口	2
	渡辺	0		坂本	4
	山田	3		山本	2
PT	(1)	17	PT	(9)	31

〔審・菅野・半田〕

大崎電気25〔1015—1212〕24大阪体大

【戦評】前半、大体大は早いパス回しからポストにボールを集め4—1とリードしたが、大崎も確実なパスワークから宮下の高打点からのシュートで加点。後半に入ってもシーソーゲームが続き、残り5分1点差の好ゲームを展開、大

	〔大体大〕	得		〔大崎〕	得
GK	大谷	0	GK	岡部	0
	徐	0		矢内	0
FP	村上	0	FP	松岡	4
	楠本	7		武田	1
	福村	5		首藤	6
	山村	2		中田	0
	大塚	3		山本	3
	渡辺	0		越迫	0
	谷口	4		菅田	2
	真田	0		星野	1
	西岡	1		大和田	0
	梅基	2		宮下	8
PT	(0)	24	PT	(2)	25

〔審・上久保・北井〕

体大GK徐の好守がこの試合を一段と盛り上げた。（北山）

準決勝

湧永製薬30〔12 18－6 9〕15日新製鋼

［戦評］ともに日本リーグ同士で激しい得点争いが期待された。

湧永は生駒、玉村が豪快にロングシュートで先手をとるのに対し日新は湧永の激しいディフェンスを打ち崩すことができず、時間とともに点差がついた。

8連覇を目指す湧永の闘志がそのままプレーにあらわれた試合であった。（北井）

	〔湧永〕	得	〔日新〕	得
GK	大城	0	西川	0
GK	藤井	0	森田	2
FP	生駒	7	森	2
FP	玉村	8	西山	1
FP	藤本	2	甲斐	3
FP	志賀	4	藤井	1
FP	中川	0	日野	4
FP	荷川取	3	堀田	1
FP	山本	2	藤本	0
FP	奥田	1	一ノ瀬	0
FP	樽原	1	高木	3
FP	酒巻	2	野中	0
PT	(2)	30	(1)	15

（審・島崎 井上）

本田技研鈴鹿25〔12 13－6 14〕20大崎電気

［戦評］日本リーグ加盟チーム同士の準決勝。両チームとも特に緊張感もなく、持ち味の良いプレーが随所にあり、走、跳、投の力強い男子特有の攻防戦で、前半は大崎電気が1点リード。

後半開始直後、本田技研が同点とし、両チーム一進一退の緊迫したゲーム展開であり、大崎のディフェンスが乱れたところを本田がスカイプレーなどで次第にリズムに乗り、GKの好守などで助けられながら勝利を得た。（井上）

	〔本田〕	得	〔大崎〕	得
GK	大畑	0	岡部	0
GK	橋本	0	矢内	0
FP	三本松	0	松岡	0
FP	田野	0	武田	0
FP	立木	3	首藤	1
FP	尾上	2	中田	0
FP	内藤	3	山本	11
FP	栗屋	3	越迫	0
FP	吉山	3	菅田	1
FP	田口	6	星野	4
FP	山本	5	大和田	0
FP	平子	0	宮下	3
PT	(2)	25	(5)	20

（審・上久保 北本）

決勝

本田技研鈴鹿24〔13 11－12 9〕21湧永製薬

［戦評］本田はスタートダッシュ良く、立木のミドル、尾上の速攻、山本のサイドなどで多彩に攻めたが、湧永がディフェンスを建て直し、本田を8分間無得点に押さえこみ、玉村の速攻などで盛り返したが、前半の貧攻がたたり、退場の多くなった本田を追い切れず、2点差で前半を折り返す。

後半に入り10分までに同点とした湧永だったが、本田のミドル、速攻を押さえきれず、一度もリードを奪えず、本田の初優勝、胴上げを見るに至った。（坂井）

	〔本田〕	得	〔湧永〕	得
GK	大畑	0	大城	0
GK	橋本	0	藤井	0
FP	佐々木	0	生駒	9
FP	三本松	1	玉村	1
FP	田野	0	藤本	1
FP	立木	4	志賀	1
FP	尾上	2	中川	2
FP	内藤	3	荷川取	1
FP	栗屋	4	山本	3
FP	吉山	3	奥田	3
FP	田口	3	樽原	0
FP	山本	4	酒巻	0
PT	(3)	24	(3)	21

（審・上久保 北井）



V8を狙った湧永だが、惜しくも決勝で敗れた

［本田技研鈴鹿・喜井監督］

感激の初優勝、胴上げを終えてから記者インタビューを受け、その興奮がさめやらぬ表情で語ってくれた。

「やはり11月に終った日本リーグでの初優勝が大きな自信になったと思います。準決勝、決勝とGKがよく当たって、ディフェンス全体が良かったのが勝因でしょうか。攻撃面でも決勝は多彩な展開ができましたし、良かったと思います。これで一昨年のお返しもできました。」

一昨年の総合の準決勝で湧永と対戦、後半終了間際までリードしながら、一つのミスから逆転を許し無念の涙を飲んだ本田技研が、その湧永の8連覇を阻止、見事初優勝を飾った。

女子　東女体大、学生チーム初の王座に

1回戦

東京重機 23（13—6、10—15）21 **日体大**

〔戦評〕前半20分頃まで得点は一進一退で6—6。しかし内容は、互いにハンドリングのミス、パスミスなど寒さのせいかイージーなミスが多かった。20分を過ぎる頃から日体大のシュートは入らなくなり、重機が7点を連取、一気に優位に立った。

後半立ち上がり、日体大は重機のミスからの速攻、ポストなどで4連取し反撃に出たが，ミスから逆に速攻をくらい追いつけない。重機もセットでは攻めあぐみが目立ったが、相手ミスを速攻に結びつけ逃げ切った。（森）

	〔日体大〕	得	〔重機〕	得
GK	安室	0	石井	0
GK	森	0	大角	0
FP	大野	3	山崎	2
FP	今野	1	市川	3
FP	堀米	5	佐藤	3
FP	梅原	3	嶋田	0
FP	江原	3	藤井	0
FP	黒沼	3	伊原	1
FP	長澤	0	古谷	5
FP	山口	0	大林	7
FP	市来	3	矢田	2
FP	新田	0	星	0
PT		(2)		(1)
		21		23

（審・岡本　清水）

東女体大 23（12—11、11—11）22 **大和銀行**

〔戦評〕インカレ優勝の東女体大が日本リーグ6位の大和銀行に挑んだ試合は、最後の最後まで白熱した好ゲームとなり、久々に全日本総合で学生が勝利を収めた。

東女体大は韓国からの留学生、金、柳コンビを軸に鈴木らも得点をコンスタントにあげた。一方大和は、丸田、赤瀬らを中心によくロングを決めたが、前半、東女体大GK野寺にPTを4連続阻止されリードを許した。

後半、残り1分30秒、金が大和のパスをインターセプト、柳にロングパスをつないで貴重なリードを奪い勝利を収めた。（清水）

	〔大和〕	得	〔東女体〕	得
GK	高浜	0	山本	0
GK	増見	0	野寺	0
FP	丸田	8	猫本	2
FP	上西	4	越	0
FP	赤瀬	2	小野	0
FP	佐々木	2	長谷部	0
FP	植田	0	北島	3
FP	天谷	0	鈴木	9
FP	小池	2	金	5
FP	甕川	2	柳	4
FP	上村	2	藤井	0
FP	藤本	0	佐藤	0
PT		(6)		(4)
		22		23

（審・上久保　北井）

大崎電気 35（17—1、18—4）5 **FCC**

〔戦評〕大崎電気は、相手方のパスミス、シュートミスより速攻にて加点し、さらに多彩な攻撃にてリードする。FCCも必死に防御しながら攻撃に移るが、スピード及びボールテクニックなどで劣り、大崎電気の一方的なゲーム展開となった。（井上）

	〔FCC〕	得	〔大崎〕	得
GK	上野	0	大西	0
GK			梅野	0
FP	川波	2	時実	2
FP	松田	1	松尾	7
FP	薮田	0	塩谷	2
FP	妹川	0	石井	2
FP	宮島	0	沖山	5
FP	田中	1	徳渕	2
FP	山田	1	須永	2
FP	横瀬	0	金玉花	8
FP			李相玉	5
FP			鈴木	0
PT		(0)		(5)
		5		35

（審・後藤　島田）

筑波大 20（7—9、13—6）15 **日立栃木**

〔戦評〕速攻に活路を見出そうとする日立、一方、1年生ながらエースアタッカーの磯山にロングを打たせようとする筑波大の戦法は、両チームディフェンスの好守にあって実を結ばず、前半は9—7と日立リードのロースコアのゲーム様相となった。

後半に入ると筑波大はディフェンスを高くし、積極的に転換し、15分にリードを奪った。そして、そのままリードを広げ、26分には19—14として念願の勝利を手にした。（岡本）

	〔日立〕	得	〔筑波大〕	得
GK	葛生	0	杉本	0
GK	岡本	0	吉村	0
FP	手打	2	沼田	3
FP	前田	2	稲垣	0
FP	清水	2	河野	0
FP	井沢	2	中嶋恵	4
FP	吉田	3	中嶋華	3
FP	山岸	3	三宅	5
FP	菅原	0	相川	1
FP	山口	0	鋤崎	0
FP	石毛	0	和田	0
FP	尾苗	1	磯山	4
PT		(3)		(1)
		15		20

（審・川島　森）

日本ビクター 33（22—9、11—11）20 **愛知教員**

〔戦評〕試合開始から日本ビクターが速攻、セットで得点し、試合のペースをつかんだ。愛知教員も必死に攻防したが、地力に勝るビクターの前に敗れた。

点差は開いたが、両チームの最後までの力一杯の戦いぶりをたたえたい。（半田）

	〔愛知〕	得	〔日ビ〕	得
GK	松下	0	渡辺	0
GK	三宅	0	小口	0
FP	稲垣	3	武藤	5
FP	天野	3	長田	10
FP	鈴木	1	枝川	5
FP	武田	1	下條	3
FP	木下	0	平松	1
FP	富田	5	根本	4
FP	大久保	7	太田	0
FP	下川	0	工藤	4
FP	鏡	0	松井	1
FP			永岡	0
PT		(0)		(1)
		20		33

（審・島崎　井上）

シャトレーゼ 23（10—10、13—9）19 **ブラザー工業**

〔戦評〕前半はお互いに慎重な攻めにて終始するも決定打がなく、同点にて折り返す。

後半に入るとシャトレーゼのポストプレーが決まり出して先行、それをブラザーが追いつくという試合展開となったが、攻撃に幅があるシャトレーゼが接戦の末勝利を収めた。（島崎）

	〔ブ工〕	得	〔ジャト〕	得
GK	大藪	0	丸山	0
GK	岡本	0	星野	0
FP	荒木	6	渡辺	0
FP	小池	0	嶋崎	1
FP	茂山	5	海道	3
FP	中村	3	松沢	3
FP	道上	3	春山	2
FP	太田	1	百瀬	5
FP	久保田	0	武田	0
FP	末永	0	平田	2
FP	坂倉	0	小林	0
FP	大久保	1	李京姫	7
PT		(0)		(5)
		19		23

（審・北山　大原）

2回戦

立石電機山鹿 17（10—2、7—8）10 **東京重機**

〔戦評〕両チームともセットでの攻防はパターンが単調なのかシュートを読まれている感じで、得点に結びつかず、守り合いが続いて18分過ぎまで2—0で立石のリード。

その後立石のコンビプレーが合い始め得点が動き始めたが、重機は得意の速攻パターンを押さえられ、初得点が24分。前半は僅か2点で終わった。

後半に入ると重機が速攻ペースとなり、15分には7—12と追い上げたが、ここへ来て前半無得点に押さえていた立石・野嶋に連続して決められ勝負は決まった。（森）

	〔立石〕	得	〔重機〕	得
GK	荒木	0	石井	0
GK	岡本	0	大角	0
FP	山口	0	山崎	2
FP	近藤	2	市川	2
FP	江口	0	佐藤	1
FP	岩村	5	嶋田	0
FP	池上	0	藤井	0
FP	野嶋	5	伊原	1
FP	山内	3	古谷	0
FP	福家	0	大林	1
FP	武津	2	矢田	3
FP	中山	0	星	0
PT		(2) 17		(0) 10

（審・中本 福田）

東京体大28（13−11 15−14）25大崎電気

〔戦評〕大崎・石井、東女体大・金の両エースのロングシュートの打い合いで、全く互角の状態で始まる。5分過ぎ、東女体大は柳のサイドシュート、北島の速攻からPTを誘い、山田のPTなどで10分までに4点を連取、その後再び互角の展開で、前半を13−11で終了。後半に入り、大崎は李の活躍で終了5分前に1点差まで詰めたが、大切な所でのシュートミスが目立ち、逆に東女体大は1人1人が着実にシュートを決めて快勝した。（島田）

	〔東女体〕	得	〔大崎〕	得
GK	山本	0	大西	0
GK	野寺	0	梅野	0
FP	猫本	1	時実	0
FP	越智	0	松尾	0
FP	小野	3	石井	7
FP	長谷部	0	沖山	3
FP	北島	6	徳渕	3
FP	鈴木	6	須永	0
FP	金順淑	6	金玉花	6
FP	柳京美	6	李相玉	6
FP	藤井	0	江口	0
FP	佐藤	0	鈴木	0
PT		(3) 28		(2) 25

（審・岡本 清水）

日本ビクター24（15−8 9−11）19筑波大

〔戦評〕前半、日本ビクターはポスト、速攻で先行し、勢いに乗るかに見えたが、6分～14分までノーゴール。その間、筑波大にもチャンスはあったが、相手ディフェンスの速いチェックに合い、崩し切れなかった。15過ぎより、日本ビクターが速攻、ポスト、サイド攻撃などで加点し、試合の主導権を握った。

後半に入り、筑波大もスカイプレー、速攻などで健闘し追い上げるが、前半の7点差をひっくり返すまでには至らなかった。（中本）

	〔日ビ〕	得	〔筑波〕	得
GK	渡辺	0	杉本	0
GK	小口	0	吉村	0
FP	武藤	2	沼田	2
FP	長田	8	稲垣	0
FP	枝川	1	河野	0
FP	下條	2	中嶋恵	3
FP	平松	1	中嶋華	2
FP	根本	7	三宅	3
FP	太田	0	相川	4
FP	工藤	3	鋤崎	0
FP	松井	0	和田	1
FP	永岡	0	磯崎	4
PT		(4) 24		(0) 19

（審・川島 森）

シャトレーゼ23（13−11 9−10）21ジャスコ

〔戦評〕寺沢の巧いゲームメークとショートパスをからませてのポストプレーで攻めるジャスコとエース李京姫のロングシュートを軸にしたセット攻撃のシャトレーゼの対戦は、期待を裏切らない好ゲームとなった。

試合はシャトレーゼが先行、それをジャスコが追いかけるという展開で進み、後半の半ばまで1点を争うクロスゲームとなった。しかし、ここでジャスコに退場が続き、この間にシャトレーゼは李京姫、海道のロングで差を開く。窮地に立ったジャスコは、李に対してマンツーをとり、速攻で猛追したが結局及ばず、22−21でシャトレーゼが勝利を収めた。（清水）

	〔シャト〕	得	〔ジャ〕	得
GK	丸山	0	木村	0
GK	星野	0	小深田	0
FP	渡辺	0	寺沢	4
FP	嶋崎	3	石田	3
FP	海道	7	近藤	8
FP	松沢	2	鷲野	0
FP	春山	0	服部	1
FP	百瀬	0	高岡	1
FP	武田	0	石田	0
FP	平田	1	寺西	0
FP	小林	0	池田	4
FP	李京姫	9	常石	0
PT		(3) 22		(0) 21

（審・島田 後藤）

準決勝

東女体大30（11−11 19−10）21立石電機　山鹿

〔戦評〕スタートから両チーム持ち味を出し合って全く互角の展開で、11−11で前半を終わる。

後半、東女体大は立石のディフェンスのスキをつきカットイン、PTなどで6連取の好スタートを切った。

その後も立石は、東女体大のポスト、サイド、カットイン、ロングと各選手がゴールを狙う多彩なスピーディーな攻めを止めることができず敗れた。

後半立ち上がりの〝空白〟がすべてであった。（森）

	〔東女体〕	得	〔立石〕	得
GK	山本	0	荒木	0
GK	野寺	0	岡本	0
FP	猫本	2	山口	0
FP	越智	0	近藤	2
FP	小野	3	江口	0
FP	長谷部	0	岩村	0
FP	北島	3	池上	1
FP	鈴木	11	野嶋	14
FP	金順淑	5	山内	2
FP	柳京美	6	福家	0
FP	藤井	0	武津	1
FP	佐藤	0	中山	1
PT		(6) 30		(6) 21

（審・島田 後藤）


東女体大は連日強敵を倒し快進撃

シャトレーゼ 31（18―11 13―10）21 **日本ビクター**

〔戦評〕シャトレーゼのポストシュート、ビクターのロングシュートと両チームの特徴を生かしての攻撃で、5分過ぎまで全く互角のスタートであったが、シャトレーゼのフリースローで李のロングシュートが決まり、その後の2点連取でシャトレーゼは主導権をつかんだ。

ビクターは、武藤、下條のロングシュートがシャトレーゼの早いディフェンスにつぶされ、ペースをつかめず苦戦が続いた。シャトレーゼは李の好リードで若い選手がのびのびとプレーをし、今大会最高のプレーで危な気ない勝利であった。（島田）

〔日ビ〕

	選手	得
GK	渡辺	0
GK	小口	0
FP	武藤	5
FP	長田	5
FP	枝川	1
FP	下條	5
FP	平松	2
FP	根本	3
FP	太田	0
FP	工藤	0
FP	松井	0
FP	永岡	0
計		21
PT		(1)

〔シャト〕

	選手	得
GK	山丸	0
GK	野星	0
FP	辺渡	0
FP	崎嶋	4
FP	道海	7
FP	沢松	5
FP	山春	0
FP	瀬百	5
FP	田武	0
FP	田平	0
FP	林小	0
FP	李京姫	10
計		31
PT		(5)

（審・川島　森）


昨年は1回戦で敗退したシャトレーゼが今大会は大活躍、見事決勝へ

決勝

東女体大 29（15―13 14―9）22 **シャトレーゼ**

〔戦評〕共に決勝初出場でプレッシャーを感じてはいただろうが、それを感じさせないスピードあるプレーを展開したが、中心はやはり韓国選手であった。

立ち上がり、シャトレーゼが李京姫の連取で先行したが、東女体大が柳京美の速攻で逆転、松沢のサイドで再逆転とめまぐるしい点の取り合い。15分過ぎ、シャトレーゼの連取で3点リードし、リズムをつかむかに見えたが、25分から東女体大は北島のポスト、柳のサイドで逆転、前半15―13で東女体大がリード。

後半5分過ぎ、東女体大は2名退場の苦境に立たされたが、これを互角にしのいだのが大きく、この試合の流れを東女体大に傾け、シャトレーゼのディフェンスの甘くなったのをつき、ポスト、ミドルと着実に加点。一方、京姫へのマークがきつくなり、シャトレーゼはチャンスを作れず、終盤一気に点差が開いてしまった。（斉藤）

〔シャト〕

	選手	得
GK	山丸	0
GK	野星	0
FP	辺渡	0
FP	崎嶋	0
FP	道海	1
FP	沢松	2
FP	山春	1
FP	瀬百	1
FP	田武	2
FP	田平	1
FP	林小	1
FP	李京姫	13
計		22
PT		(4)

〔東女体〕

	選手	得
GK	本山	0
GK	寺野	0
FP	本猫	3
FP	智越	0
FP	野小	2
FP	長谷部	0
FP	島北	6
FP	木鈴	4
FP	金順淑	3
FP	柳京美	11
FP	井藤	0
FP	藤佐	0
計		29
PT		(1)

（審・島田　後藤）

〔東京女子体育大・高野監督〕

「毎日毎日夢のようでした」

今大会、連日実業団の強豪チームを倒すたびに、高野監督は信じられないというような表情でインタビューに応じた。そして、あれよあれよという間にトップの座についたのだが……。

「シャトレーゼとは、李京姫選手を除いたチームとは練習試合をやってもほとんど負けたことがないので（30試合ぐらいやって1試合ぐらいかな）、何とかセットからの攻撃で李選手をおさえれば……とは思ってました。今日は、シャトレーゼさんが李選手にボールを集める作戦だったのか、他の選手があまり打ってこなかったので、ディフェンス面での指示が徹底できました」

夢のようだとは話していたが、インカレで優勝してから約1ヶ月、この総合目指して秘かに期するものがあって挑んできたことが監督の言葉のはしばしにもあった。

「いつも暮の総合には、学生チームは、卒業、就職などの問題で万全で臨めない事が多いのですが、今回のウチは選手たちもよく頑張ってくれました。そして、金、柳の二人の活躍が目立ちましたけど、彼女たち二人に引っ張られて他の選手たちの力も随分アップしたと思います」

総合の前の世界選手権大会参加の影響もあってか、実業団チームが不甲斐なかったこともあったが、東女体大チームのスピードある攻防は新鮮な印象を与えてくれた。

■第9回女子世界選手権大会Aグループ■

ソ連が圧倒的強さを見せ優勝

―日本は14位―

第9回女子世界選手権大会Aグループは、昨年の12月4日から14日までの11日間、オランダで開催された。

今大会、11年ぶり6回目の出場を果たした日本は、予選リーグでチェコ（2位）、ノルウェー（3位）といった強豪と当たり、ライバル中国とは引き分けたものの1分2敗で13～16位決定リーグへ。

しかし、下位リーグとはいえ、アメリカ、フランスを倒して14位となった。

優勝争いはソ連とチェコの対決となったが、今大会圧倒的強さを見せたソ連が快勝、〝女王〟の座に復帰した。

ロサンゼルス・オリンピックで2、3位と大健闘を見せた、韓国、中国だが、今大会ヨーロッパ勢の〝カベ〟は厚く、中国が9位、韓国は11位にとどまった。

［最終順位］

①ソ連
②チェコ
③ノルウェー
④東ドイツ
⑤ルーマニア
⑥ユーゴ
⑦西ドイツ
⑧ハンガリー
⑨中国
⑩オランダ
⑪韓国
⑫オーストラリア
⑬ポーランド
⑭日本
⑮フランス
⑯アメリカ

▼予選リーグA組

ユーゴ 25（14―10, 11―5）15 ポーランド
ソ連 30（19―6, 11―9）15 オーストリア
ユーゴ 24（10―7, 14―7）14 オーストリア
ソ連 24（11―7, 13―8）15 ポーランド
オーストリア 18（9―5, 9―10）15 ポーランド
ソ連 14（5―7, 9―7）14 ユーゴ

［順位］①ソ連（2勝1分）②ユーゴ（2勝1分）③オーストリア（1勝2敗）④ポーランド（3敗）

▼予選リーグB組

ハンガリー 30（17―11, 13―4）15 アメリカ
東ドイツ 34（20―9, 14―9）18 オランダ
東ドイツ 23（14―3, 9―4）7 アメリカ
ハンガリー 21（10―13, 11―6）19 オランダ
東ドイツ 14（5―9, 9―5）14 ハンガリー
オランダ 18（6―9, 12―8）17 アメリカ

［順位］①東ドイツ（2勝1分）②ハンガリー（2勝1分）③オランダ（1勝2敗）④アメリカ（3敗）

▼予選リーグC組

チェコ 24（11―6, 13―11）17 日本

〔日本〕		得
GK	葛生	0
	山口	0
FP	近藤	2
	小池	7
	野嶋	3
	岩村	1
	山岸	2
	林	2
	池上	0
	前田	0
	時実	0
	山内	0
	(4)	17

中国 20（8―5, 12―14）19 ノルウェー
ノルウェー 27（16―7, 11―10）17 チェコ
日本 20（10―7, 10―13）20 中国

〔日本〕		得
GK	葛生	0
	山口	0
FP	野嶋	9
	小池	5
	山岸	2
	前田	3
	近藤	1
	岩村	0
	寺沢	0
	池上	0
	時実	0
	林	0
	(3)	20

チェコ 27（13―9, 14―8）17 中国
ノルウェー 33（13―10, 20―8）18 日本

〔日本〕		得
GK	葛生	0
	山口	0
FP	武藤	3
	岩村	1
	近藤	2
	小池	3
	池上	2
	前田	2
	時実	0
	山岸	0
	野嶋	3
	林	2
	(1)	18

［順位］①ノルウェー（2勝1敗）②チェコ（2勝1敗）③中国（1勝1分1敗）④日本（1分2敗）

▼**予選リーグD組**

ルーマニア 25（15－10、10－12）22 韓国
西ドイツ 21（10－7、11－10）17 フランス
ルーマニア 22（12－12、10－9）21 西ドイツ
韓国 27（14－5、13－6）11 フランス
西ドイツ 24（9－6、15－10）16 韓国
ルーマニア 27（11－3、16－5）8 フランス

［順位］①ルーマニア（3勝）②西ドイツ（2勝1敗）③韓国（1勝2敗）④フランス（3敗）

▼**準決勝リーグI組**

東ドイツ 25（11－11、14－9）20 オーストリア
ソ連 27（10－11、17－6）17 オランダ
ユーゴ 19（10－10、9－8）18 ハンガリー
オランダ 22（13－8、9－9）17 オーストリア
ソ連 19（11－11、8－7）18 ハンガリー
東ドイツ 27（13－10、14－7）17 ユーゴ
ユーゴ 25（12－8、13－8）16 オランダ
ソ連 24（10－12、14－5）17 東ドイツ
ハンガリー 22（12－10、10－9）19 オーストリア

［順位］①ソ連（4勝1分）②東ドイツ（3勝1分1敗）③ユーゴ（3勝1分1敗）④ハンガリー（2勝1分2敗）⑤オランダ（1勝4敗）⑥オーストリア（5敗）

▼**準決勝リーグII組**

チェコ 19（11－8、8－5）13 西ドイツ
ノルウェー 29（19－9、10－7）16 韓国
ルーマニア 32（16－14、16－10）24 中国
チェコ 22（10－10、12－11）21 ルーマニア
韓国 19（7－11、12－8）19 中国
ノルウェー 19（10－6、9－8）14 西ドイツ
ノルウェー 23（13－12、10－11）23 ルーマニア
西ドイツ 21（9－11、12－9）20 中国
チェコ 26（12－10、14－13）23 韓国

［順位］①チェコ（4勝1敗）②ノルウェー（3勝1分1敗）③ルーマニア（3勝1分1敗）④西ドイツ（2勝3敗）⑤中国（1勝1分3敗）⑥韓国（1分4敗）

▼**13～16位決定リーグ**

フランス 21（10－7、11－4）11 アメリカ
ポーランド 18（5－11、13－5）16 日本

	〔日本〕	得
GK	葛生	0
	山口	0
FP	武藤	1
	岩村	1
	近藤	3
	小池	5
	池上	0
	前田	1
	時実	0
	山岸	1
	野嶋	4
	林	0
	(1)	16

ポーランド 19（9－10、10－7）17 フランス
日本 25（11－12、14－8）20 アメリカ

得	〔日本〕	
0	葛生	GK
0	小深田	
2	武藤	FP
1	岩村	
4	近藤	
6	小池	
0	池上	
0	前田	
0	時実	
2	井沢	
3	山岸	
7	野嶋	
25	(5)	

日本 16（9－6、7－9）15 フランス

得	〔日本〕	
0	葛生	GK
0	小深田	
0	岩村	FP
1	近藤	
3	小池	
3	池上	
1	前田	
1	時実	
0	井沢	
0	山岸	
7	野嶋	
0	山内	
16	(4)	

ポーランド 22（11－6、11－8）14 アメリカ

［順位］⑬ポーランド⑭日本⑮フランス⑯アメリカ

▼**11・12位決定戦**

韓国 31（5－2、1－3、2－1、0－1、10－11、13－12）オーストリア

▼**9・10位決定戦**

中国 22（11－7、11－10）17 オランダ

▼**7・8位決定戦**

西ドイツ 18（8－9、10－8）17 ハンガリー

▼**5・6位決定**

ルーマニア 28（2－2、4－2、12－9、10－3）26 ユーゴ

▼**3・4位決定戦**

ノルウェー 23（9－11、14－8）19 東ドイツ

▼**決勝**

ソ連 30（15－10、15－12）22 チェコ

【決勝戦】

得	〈ソ連〉		〈チェコ〉	得
0	シャリモワ	GK	フラドスカ	0
0	ミトリウク		パソーバ	0
6	カルローワ		グンスパリコーバ	1
0	メンコーワ		トランジコーバ	3
1	ツルスチーナ		スミドーバ	0
4	セメョノーワ		ブダイオーバ	2
14	キルスチク	FP	ダミトソーバ	0
0	トウストガン		デュリシノーバ	9
2	バサノーワ		クトコーバ	0
0	グッセーワ		スタソーバ	3
3	ネマスカロ		マスグトーバ	4
0	オレクシク			
30	（7）	PT	（5）	22

第9回女子世界選手権大会
日本代表選手団の感想文から

日本女子に希望の灯が
●団長・大野金一

日本が女子世界選手権に参加するのは、予選が「密室試合」となった一九七五年（昭和50）の第6回大会以来11年ぶりのことです。その翌年のモントリオール・オリンピックのあとは、アジア予選で敗退したために、世界大会に出場する機会はありませんでした。

今回は、前回のロサンゼルス・オリンピックにおいて、2、3位を占めた韓国、中国が自動的に出場権を取得していたために、日本がアジア代表として参加したわけですが、それはともかくとして、今回の大会で、日本が韓国、中国は勿論、ヨーロッパ勢の中でも十分やれるという、日本の世界におけるレベルを測る基準を見つけることができたことで、大変意義のあった出場だったと思います。

私は、10年以上も前から、女子にも小さい時から野球を、が持論だったのですが、奇しくも、今回のチームに、小学校で硬式野球を経験したことのある野嶋選手と、中学時代にソフトボールをやっていたという小池選手がいて、この二人がこの大会の個人得点のベストテンに入るという、アタッカーとして十分の働きをしました。

従来、横っ走りばかり多かった攻撃に縦の攻撃が加わり、パスワークも全然異なってくる。韓国、中国も二、三人のアタッカーをもっているので、アジア三国の条件は同じになったわけで、今回順位決定リーグで韓国と引き分けた中国と予選リーグで日本が引き分けたのもその表われともいえるでしょう。

1年前ソウルで行われた女子ジュニアの世界選手権で、韓国対中国戦を観戦した国際ハンドボール連盟の会長が、「おばあちゃんハンドボールはソウルで死んだ」と感想をもたらしましたが、ヨーロッパのチームは、1～3位に入ったソ連、チェコ、ノルウェー以外は、まだ「おばあちゃんハンドボール」という感じでした。

タテ、ヨコの大きいヨーロッパのディフェンダーを前に走り回っても、50㏄のバイクが七半のオートバイと競争するようなもので、日本がアタッカーを柱に、息の合った連繋プレーをナショナルチームの強化合宿で磨き上げ、クイックシュートを打てるようになれば、ヨーロッパに対する攻撃は十分通用するでしょう。また、それ以外勝つ道はありません。

ディフェンスも、大柄な相手にいかにしてプレッシャーをかけるか、これもスタミナと連繋次第ですから、やはりナショナルチームとしての連習量とホームチームでの心がけ、訓練が課題といえます。

世界選手権大会に参加して
●監督・井薫

12月14日のファイナル決勝戦は、ソ連とチェコ、それに先立ち7・8位中国、オランダ、3・4位決定戦が東独、ノルウェーで、都合3試合が会場をロッテルダムに移して行なわれました。

奇しくも、日本がCグループで対戦したチェコ、中国、ノルウェーが登場した訳です。

チェコは、今夏来日したユリシノーバーが大活躍しましたが、総合力に優るソ連が終始リードで圧勝。

感動的だったのはノルウェー、東独戦で、3位とオリンピックの出場権をかけての戦いは、単調な攻めの東独と対照的に多彩な攻撃力で、今大会大暴れのノルウェーが、ロング、ポスト、サイド、速攻を確実に得点、GKの好守もあって堂々の3位入賞でした。スタンドには、参加チーム随一、地元のオランダをも上廻る応援団が予選リーグから熱狂的で、勝利決定の一瞬は選手とスタンドが一体になっての喜びで、監督自ら国旗を片手にコート内を乱舞する有様で、それがまた多くの観客の拍手を呼んで、まさに狂喜のシーンでしたが、東独勢中心の女子ハンドボール界に前回の大会とオリンピックでおきたアジア旋風につぐ快挙で、新らしい夜明けだと西側の関係者はうなずきあっていました。

中国も開催国相手で、前半やや苦しみましたが、順当勝ちでした。

さて今大会に参加するにあたり、日本チームの課題は大きく言って二つあったと思います。第一は、来年に迫ったオリンピックのアジア予選で対戦する中国との対戦、さらに11年ぶりの世界選手権大会出場での位置づけの確認がそれでした。

まず中国戦。4度にわたる中国リードを選手全員が燃えて追いつき、最後に同点からラストチャンスのマイボールを手にしましたが、僅かに時間が足らず勝ちを逸した内容の試合は、中国に追いつけ、追い越せの悲願が一歩前進した事だと思います。

2月、7月の遠征で証明された小池、野嶋の両アタッカーは、期待通りの活躍で、大会を通じての得点も二人とも10位前後で、満足のいくものでした。それと、速攻での得点が計算出来るようになったのも今回の成果で、樫塚コーチの指導を選手がやっと理解を深め、展開する力をつけて来た現れで、この点はもっと、より多くの特点につながるよう追求して行くべきだと思いました。

もうひとつの課題のディフェンスは、水上コーチの担当ですが、やはり多くの体験が最大の練習法であり、ゲーム中もほとんど守りに関しては水上コーチの指示をうけて、試合を重ねるごとに思いきりの良いディフェンスが敷けるようになり、これも明るい方向づけを得たと思います。

ただディフェンスに関しては、国内の審判と世界の部分で明らかに解釈が違っている所があり、特に昨年の総合で話題となった、段階的適用（ポストプレーヤーのマークの仕方など）を世界の判定に統一しなければ、日本の防御技術はいつまでも上達しないと編成しました。この点、単んに世界に行ってみたら、日本と違いますと、片づけるのではなく、具体的判定の部分をスタッフでまとめて、審判部と検討、善処していきたいものです。

ノルウェーのパワーと高さ、多彩さには手を焼き、大差となりましたが、2位になったチェコ、ポーランドあたりとも、そんなに大きい差がある訳でもなし、中国、韓国の引き分けや、Cグループ勢の上位入賞を考える時、幾つもの課題はあるものの、その前途は決

して暗くないと思いました。

大野専務理事に団長として参加して貰い、女子球界の内容をつぶさに見ていただく事も、我々の励みになりましたし、参加した総ての国が、日本を初めとするアジア遠征を希望しており、チャンピオンになったソ連が来春参加するジャパンカップを初め、ヨーロッパの列強が日本のコートにその姿をみせるのが、とても多くなりそうな昨今の現状です。

GK葛生の頑張りや、小兵の池上、近藤もよくやりました。そして前田、岩林がリーダーとしての自覚がやっと本物になって来た、そんな印象を強くした遠征で、全員、事故、怪我のない大会でもありました。出発直前の強化合宿で大崎電気の男子メンバーとのゲームも、効果的であった事を今後に役立てたいと思います。

来る87年、もうとにかく、総ての力を結集して頑張る以外にオリンピックへの道はないと思います。ご協力をよろしくお願いします。

世界選手権での速攻展開と現状

●コーチ・櫻塚正一

11年振りの世界大会出場の中、大会内容はますますの大型化の中に速さを加えたチームの活躍が印象深く残っている。前回の大会では、韓国が早さをほしいままに活躍し、ヨーロッパのチームを驚ろかした成績を残し、その流れがロサンゼルスのオリンピックまでも続いた。その様な状況から、2年後の世界大会にはアジアの特徴であった早さを総ての国が取り入れ、速さに於いて優劣をつけることは出来ないまでの現状だった。

展開内容は、GKから相手ゴール前まで到達するパスの回数は3回以上は多くなく、これ以上のパス回数が入る時は早い防御の帰陣に合い、速攻を成功させることはむずかしい。また、GKのボール出しの正確さも素晴らしい。

さらにGKの中継に入るパサーの状況判断の正確さと早さを見逃すことは出来ない。現在のハンドボール展開として、速攻で得点を得ることが試合に勝つための大きい要因となって来ていることを総べてのチームが、認識していることを忘れることは出来ないであろう。

世界大会に参加するまでに、2年のヨーロッパ遠征を行ない速攻展開には次の課題を反省の材料としていた。

本年2月の東独の遠征では、展開は通用したがパス回数が多く、相手ゴール前までの到達が遅いこと。

ソ連遠征では、高さの壁にパスミス、パスカットによって失敗を重ねていた。2つの点を反省課題として大会に臨んだ。パスの回数とクロースを出来るだけ少なくし、対角にボールを展開しながらも縦のラインを強張した練習をくり返し行なった。

大会での展開内容は、次の通りであったと思う。展開途中少しはあったものの、パスミスやボールカットされて展開途中でのミスにつながることが少なく、最後まで展開を続けることが出来たこと。対角に走るタイミングを覚え、走りにとまどいが少なくなったため、思い切ったパスを通すことが出来るようになったこと、さらにパスを通した後のフォローを意識することが出来るようになりつつあることなどをあげることが出来、この状況から速攻が成功し、前回と比べ展開にも得点にも進歩を見ることが出来たと思う。

GKの単独ボール出し、中継を行なう者の状況判断と正確性、加えて状況に応じたパスを使い分けることを一層の課題としながらも、速攻によって得点を加えることが出来るようになった努力を評価したい。

さらに速攻によって得点を得る場合には、課題を理解と認識に変えるまで練習をくり返すことは当然のことながら、遅攻によってもう少し得点を得ることが出来ようになれば、速攻の成功率はさらに一層良くなると考える。遅攻での得点が取れない場合、どうしても速攻で得点を取らなければと考え、この状態が展開に余裕をもたせず、多くのミスに発展することもある。

ディフェンスから見た日本チームの課題

●コーチ・水上 一

17—24（対チェコ）、20—20（対中国）、18—33（対ノルウェー）、16—18（対ポーランド）、25—20（対アメリカ）、16—15（対フランス）、世界選手権における我がチームの成績である。

予選リーグのチェコ、ノルウェー、中国が、それぞれ2位、3位、7位になるという、結果として最もレベルの高い予選リーグのグループであった。

世界選手権に参加するにあたっての日本チームのディフェンス課題は、従来から言われていたようにパワー（高さ）に対してどのように対応していくかであった。結果的には、残念ながら今回もこの課題を解消することは出来なかった。しかしながら、次の2点から課題解消の糸口をつかむことが出来た。

①ポーランド戦で失点を18点におさえることが出来た。パワー（高さ）はあるが、スピードがそれ程ないポーランドに対し、長身者プレーヤーに積極的につめ、フエイントプレーをさせないディフエンスを行ない、成果を上げることができた。

②中国がノルウェーを破った初

女子もアジアから1代表

——ソウル・オリンピック予選——

日本協会からの照会に対する国際ハンドボール連盟（IHF）及びアジアハンドボール連盟（AHF）からの公電によると、ソウル・オリンピックから女子が8チームになったのに伴い、従来アジア、アフリカ及びアメリカの3大陸から代表決定戦で1チームを選んでいたのを、3大陸からそれぞれ1チームの出場権が与えられることになった。

昨年10月のIHF総会における執行部原案では、右のうちアジア大陸の代表は開催国・韓国が自動的に兼ねるというオリンピック憲章にも反するような提案になっていたが、総会ではこの原案が通らずペンディングになっていたものである。

戦であり、中国がどのようなタイプのチームであるか、ノルウェーがあまり情報を持っていなかったこともあるが、中国が破った要因として次のことがあげられる。1・2・3プレスディフェンスにより、長身者プレーヤーに常に2人のディフェンダーが積極的につめ、自由にプレー（特にフェイントからのカットインプレー）させなかった事と、その後のカバーディフェンスが良くトレーニングされていた事である。

この世界選手権で、日本選手は国内のゲームでは見られないようなフリースローライン上まで出てプレッシャーをかけるディフェンスが出来るようになった。しかし、まだマンツーマン的な要素が強く、他のプレーヤーとの連携（特にカバーの仕方）が消化されていなかった。それ故、パワー（高さ）があっても割と止まってプレーするチームには対応することが出来たが、パワー（高さ）があり、スピードのあるコンビネーション攻撃を持っているチームには、まだ対応出来るだけのチームディフェンスが確立されていなかったと言える。

さらに個々には、つめる時の足の出し方と、位置のとり方、あるいはつめたあとのボール保持プレーヤーのコントロールの仕方などが課題として上げられる。

最後に特に気がついた点として、サイドプレーヤーのシュート力が日本とは比較にならない程上であった。フェイントからの突破の仕方、空間の使い方（ボディーバランス）、シュートテクニック、すべてが男子のプレーと同じであった。技術は、女子だけの技術というものは無く、女子は男子の技術にいかに追いつくかが課題となる。そういう意味では、日本の女子選手（サイドシューターだけでなく）は、男子選手のゲーム、ビデオなどを見て、技術を盗む努力、あるいは体力に問題があれば、体力を養成する努力を積極的に行う必要性を痛感した。何故なら、この事はGKの阻止とも関連するからである。国内のゲームで絶えずそのようなシュートを受けていないと、世界に出てからでは遅いという事である。

印象に残ったゴールキーパー

●山口妙美

今日で、この大会の全試合が終了しました。1位・ソ連、2位・チェコスロバキア、3位・ノルウェー。この中の、2位、3位は、初め日本と同じCゾーンにいたチームです。ノルウェーは、対中国戦でエースGKを速攻のノーマークシューターと激突し、故障というハプニングで失い、その後、このエースGKは出場出来ず。No・16のGKが、その穴を埋めました。このGKは背も高く横幅もあり、一見、動きが鈍く感じましたが、反射神経も良く、ファイナルの対東ドイツ戦では、すべてのボールに反応して、ノーマークのシューターに対して前につめた時、四角のコーナーがすべて手でうまっていて、大事な場面のシュートも見事キープ、今日の彼女は、立っているだけで、体の中からゴールを死守するという気持が、スタンドから見ている私たちにもわかりました。

なぜ、私がこのノルウェーのNo・16のGKが、一番印象に残ったかというと、エースGKを失い、「自分一人しかいないんだ」という、苦しい立場を気迫で乗り越え、チームを盛り上げたというところです。それは、今の私にとっての課題だからです。この大会は、毎日、毎日が勉強になり、このGKにならい、これからは自分がやっていくんだという気持ちでがんばっていこうと思います。

チェコ戦について

●池田由美

世界選手権の初戦はチェコスロバキアでした。今年の6月にスタルト・ブラチスラバ、8月にゴッドワルドフというチェコのクラブチームが来日し、全日本をはじめ各実業団が親善試合を行なっていたので、チェコナショナルについては結構イメージがありました。チェコは、ソ連や東ドイツなどの東欧の中では小柄で、それゆえにプレーが切れるチームです。左のデュリシノーバを中心に、ステップ、アンダーシュートを速いタイミングで打ってくるので、それに対応できるディフェンス構えと、オフェンスでは粘りのある攻撃をする、ひいては帰りを速くし逆速攻に備える、という事が試合前のミーティングであげられました。

世界選手権に臨むにあたって、大崎電気で男子を相手にゲームをし、特に速い力のある攻撃に対するディフェンスを強化してきました。それが初戦から生かされていたと思います。ゲームが始まり、すぐ2点取られましたが、速攻で追いつき、それからは実によく守れていたと思います。前半10－13で折り返し、後半に入ってからディフェンスの動きが鈍くなり、クイックシュートを許したり、フローターのワンフェイントでずらされたりで、結局ディフェンスから崩れ、17－25でした。

ゲームの反省として、ディフェンスでは「よみ→ふみこみ」が出来ていましたが、最後まで続かなかった事（スタミナなど）があります。オフェンスでは、ロングが壁を利用した変化したシュートが通用し、速攻では相手が大きいと守られている感覚があり、パスを切ってしまうことが多かったのですが、スピードのあるパスと強引な走りをする事でもっと速攻が出

たようです。
　ホテルからバスで1時間揺られ、開会式もなく国歌を聴いてゲームが始まった世界選手権でしたが、次の日の大切な中国戦に結びつけることができた初戦だったと思います。

日本の速攻と世界の速攻 ●近藤育子

〝速攻〟と言えば、昔は日本がうまかったという事をよく聞きましたが、今はどこの国でも変わりがないと思います。
　速攻の攻撃パターンとしては、日本の速攻ではクロス速攻が多く、また、世界の速攻では一発速攻が多いです。
　日本国内の試合では、一発速攻でも、クロス速攻でも自由自在に使えるのですが、対外国となると上背があり、一発速攻を出しにくい面がかなりありました。
　クロス、クロスで相手をかき回しながら押していくという速攻（クロス速攻）は、大きな外人には通用するプレーなのです。高さで負けている分、それに勝つためには〝速さ〟で勝負するしかありません。そのため、この大会に向けての合宿でも〝速攻〟という部分にはかなり時間をかけて練習しました。
　走るコース、切って行くタイミング、パスワークなどいろんな問題があり、とても悩みましたが、やはり速攻でも何でもそうですが、ケース・バイ・ケースだと思うのです。
　速攻が出るという事は、積極的なつめをして、DFが良いからで、GKとの連携でシュートコースも〝かも〟という事もあり、打たせて逆速攻をかけ、それによって自分たちの攻撃に余裕が出るし、何んと言っても相手に対する威圧がかなり大きいはずだと思います。逆にやられてしまってはいけませんが……。
　これからの速攻は、世界各国のチームが一発速攻だけでなく、クロス速攻もマスターし、速攻展開で素晴らしい光景が数多く見られる事と思います。

中国戦について ●前田重子

　中国ナショナルチームとの試合は、一九八三年ロス五輪予選が最後で、それ以来全く見る機会がありませんでした。3年ぶりに見る中国は、防御・攻撃ともに函館の五輪予選の時より良くなっていました。防御は、1点差で逆転勝ちしたノルウェー戦では、大きな相手に対して、ディフェンスラインを高くしてボールへのつめが早く、ノルウェーがとまどっているうちに攻撃出来なくなっていました。
　しかし日本に対しては、やはり私たちが小さいという事で、低いディフェンスラインで守っていたため、それ程激しい防御ではありませんでした。他の欧州のチームと比べると当たりが柔らかかったと思います。
　攻撃面の特徴は、速攻の速さと、ブロックプレーの上手さでした。速攻展開はあまり上手さはなく、ただ足の速さと強引なところが目立っていたので、ディフェンスの戻りの速さである程度防げたのですが、ブロックプレーに対するディフェンスが甘かったようです。しかし全体的に、全日本の防御のレベルが以前よりも上がってきていると思います。
　中国戦に限らず、守りで粘って相手に離されまいとする気持ちが出てくるようになっ　きたのだと思います。
　こういう気持ちは、チームの状態が良くないと出てこないと思います。今までの全日本だと3、4点離されると凡ミスが続き自滅してしまう事が多かったのですが、ゴールキーパーの好守などから、粘りのある速攻で最後までなんとか行こうという気持ちが、ミスを少なくして、同点まで行けたのだと思います。
　しかし、リードできる場面もあったのにミスが出てしまった事は、やはりこれからの課題になると思います。
　来年のソウル五輪の予選に向けて、希望の見えた中国戦だったと思います。

ステップシューターとしての工夫 ●野嶋ちえみ

　世界選手権予選ラウンドのチェコ戦から最終戦のフランス戦の計6試合をふり返り、外国の厚い壁にはとても悩まされ、特に背の低い日本はまともなジャンプシュートではディフェンスの手に合わせられ、たちうち出来ない事を知らされました。我チームのロングの得点も、やはりブラインドを利用したステップシュートが多く決まっていたようです。
　自分がステップを打つうえで工夫した事は、高い壁をどちらかにずらして打つという事で、アンダーシュートのモーションで大きいディフェンスの手、または身体を一度下にしずませておいての上を打つねらい。また、ためて打つヨーロッパのシューターに対して、クイック的なステップシュートを打つという点です。しかし、これもノルウェー戦では幅のあるディフェンスにつぶされ、ゴールまで届くのがやっとで、この日のロングの得点は1点に終わってしまいました。
　決定戦を一戦一戦行ない、この大会の締めくくりとして臨んだフランス戦。この試合も、前につめて来るディフェンスと大きなGKに悩みました。打っても打っても

入らず、監督から何度も注意をうけ、どうして得点出来ないのかと……。

しかし、タイムアップの間際にその苦しんできたステップが決まった時は、とても嬉しかった。

最後に、この大会にラッキーにも出場出来た事、そしてトッププレーヤーたちのゲームが見れた事、とても勉強になりました。

ノルウェー戦について

●岩村英子

世界選手権Cグループ第3戦、ノルウェー戦は、18対33と15点差で敗れました。私たちの倍はある体格、このハンディの中で戦うには、まず2番（前のチェコ戦であたっていた為）のロングプレーヤーにマンツーディフェンスをひき、失点3点を何分守り切れるか（5分守り切れれば成功）。そしてこの大きく厚い壁にロングシュートがどれだけ通用するかにポイントをおき、ゲームに臨みました。ゲーム開始5分までに失点3点と、まずディフェンスラインは成功したものの、それもそこまで。後は、スコア通りロングはもちろん、それからずらされポストへサイドへと終始ノルウェーペースでゲームは進行、日本もシュートの本数はノルウェー同様打ってるものの、なかなか得点に結びつかず、8―20でハーフタイム。ロングシュートを打たれまいと接触したり、ポストの前に何とか位置取りしようとして、逆に振り回されて警告を受ける始末。後半は、前半ほど打ち込まれてはいないが、やはり打たれるシュートが得点で、そうなると速攻はなかなか出せずに終わる。

高く大きな上に個々のフェイントがきれる為、ずらされる部分が大きく、それに対応できるディフェンス力をもっと身につける必要があると痛感させられました。また、このゲームで通用したシュートは、やはり壁を利用してのステップやクイックシュートであり、その中からのポストサイドであったので、それらの部分をもっと確実に得点に結びつけられるようにし、以上のような反省点を今後の私たちの課題として、練習の部分で生かしていきたいと思います。

ポストプレーヤーについて

●時實良枝

世界選手権で、ポストプレイが凄くて、印象に残った人がいなかったように思います。昔は、小柄なポストプレーヤーがディフェンスの間にカットインなんかするプレーが多かったのですが、最近は、大型ポストプレーヤーが多く、中国のブロックプレーヤー、チェコ、ノルウェーの縦の2対2が多かったです。大柄なので、特に、日本がディフェンスをしている場合、振り回され、警告、退場となってしまいます。だからそんなに、動いていないのですが、体を生かしての位置取りがよいので、ポストによくボールが入ってきました。

シュートの方は、確率がやはり高く、GKをよく見てシュートしています。倒れこみ方が、ローリングして打つ方より、GKを見ながら正面から倒れ込んで打っていました。

日本のように、中継をするだけというプレーはなく、中継してもそこから自分がフェイントをしたりして、相手を生かすだけではなく、自分も生きるプレーが多かったと思いました。レベルが高く、1点を争う試合になってくると、なおさら、ポストプレーヤーが生きないと、フローターの負担が重く、試合展開が苦しくなってくるので、そこの所を、もう少し考えて、シュートの確実性、位置取りを徹底していきたいと思いました。

ポーランド戦について

●寺沢路子

世界選手権の予選リーグも終わり、次のいわゆる〝なぐさめラウンド〟の大会が9日から11日まで行なわれました。このなぐさめラウンドでは、13、14、15、16位が決まるのです。日本は、予選リーグを3敗1引き分けで終えたものの、このなぐさめラウンドでは、どうしても13位に入りたく、一つ一つの試合を大切に、また、気迫を持ち、全員で勝ちに行こうと、ポーランド戦に臨んだ。

ポーランドとは日本は初めてで、どのようなチームか、どの選手がエースなのかわからないまま試合に入り、日本は前半シュートミス、パスミスが多く、リズムになかなか乗れないまま5―13と差が開いてしまった。ポーランドの攻撃は15番がセンターからフェイントをかけ、後はずらしのパターンだけではあったけれど、相手の身体が大きいため、1人を2人で見るぐらいのディフェンスをしなくてはいけないので、前に出るのも遅れてしまった。

また、後半11―5で勝てたのだから、もっと前半から自たちのプレーが出せるよう、試合前のアップなど気をつけて行きたいです。体格でヨーロッパの選手たちに劣っている分、精神面でもっと充実したゲームが出来るように臨みたいものです。

世界のサイドプレーヤー

●井沢由美子

11年ぶりというこの大きな世界選手権に参加して、私は貴重な体験をする事が出来ました。

日本の戦った国や、その他の国の試合を見て、どの国にもプレーに特徴があるように、いろいろな試合展開や、一人一人の持ち味のプレーを見る事が出来ました。

その中で、私はサイドプレーヤ

ーについて書きたいと思います。まず一番印象深いのは、シュートです。シュートまでもって行った時の、空中での体の運び方、腕の使い方が素晴らしいと思いました。

そして、角度のない所からのシュートはいつでもゴールを狙っているという気迫が感じられました。

フローターの選手と違い、サイドプレーヤーは、シュートの確率を考えるのですが、私が見たこの大会では、確率のよいシュートをしていたと思います。

サイドでのフェイント、カットイン、強引な突っ込みには、感動するものがありました。東洋系のハンドボールと西洋系のハンドボールは、少しずつ違うと思いますが、西洋系は、体格的に恵まれている面もあると思いました。

ディフェンス面でも、45度を守っている人ぐらいまでつめていたり、力強いディフェンスが見られました。

自分自身がサイドプレーヤーである事、そして、世界のサイドプレーヤーを目指して一日一日頑張らなければいけないと思いました。

フランス戦について ●山岸和子

世界選手権大会最終戦は、14・15位決定戦対フランスでした。フランスにチームとは前にも何度か対戦し、引き分けているので、この試合は何としても、勝ち取ろうと選手一同気迫を持って臨みました。フランスも同じ気持ちだと思います。

いよいよ試合開始。左ききのエースを中心に展開されるフランスからの攻撃。体格は日本と変わりはありませんが、プレーはダイナミックでした。センタースリーから入り、右のディフェンスから崩し、エースで勝負という感じが多かったです。左ききのプレーヤーは、ロングシュートあり、フェイントありのプレーヤーなので、フランスの攻撃リズムを崩すため、ディフェンスシステムをいろいろ変えましたが、なかなか崩れませんでした。

日本も何度な得点のチャンスはあったのですが、大切な所でのミスが続き、結局、7対9でフランスリードのまま前半終了。

後半に入り、両チームとも退場者を出しながらも、得点を決めたり決められたりのシーソーゲーム、日本の攻撃も、前半よりロング、サイドシュートの本数が増し、チームのムードも一段と高まって来ました。後半中ばから、ベンチも興奮し始めました。でもフランスも集中しており、スキをねらって来ます。そんな時、いつもゴールキーパーは助けてくれました。最後の最後まで気が抜けない戦いとなり、守りに守ってやっとの思いで同点までできました。しかしこの時もう時間がありません。残り20秒。日本の攻撃ですが、フランスも必死で守っています。ベンチはシュートコール。あと5秒。この時ゴンがステップシュートを打ちました。ピッピー。ゴールインしたのです。全員総立ち、逆転の勝利。皆、抱き合い、涙を流しながら喜び合いました。

GKとしてみた各国のエースたちのシュート力 ●葛生豊子

この大会で対戦したエースプレーヤーで、各チームに左ききのフローターが目につきました。特に、初めて予選リーグでノルウェーと戦いましたが、チーム全員が長身で幅もあり、フェイントの一歩で2〜3人のディフェンスがずらされ、高い打点からふりおろされるので、スピードもあり、男性的なシュートで、コースが読めずに終ってしまいました。

チェコ戦では、小柄ではありますが、相手のディフェンスを利用して、ブラインドをつくシュート、また、クイックシュートでタイミングをずらされるケースが多く、左ききのプレーヤーに多く得点されました。

フランス戦では、ひとり全身ばねのようで左ききの素晴らしい選手に出会いました。フェイント力がするどく、力強いシュートで小柄ですが、フリースローラインからロングを打って得点するすごい選手だと思いました。

中国戦では、チェコに感じが似ていて、早いテンポでクイックシュートが多くみられました。フォーメーションのような攻撃、速攻がすばやいと思いました。手首のかわしが早いと感じました。

アメリカ、ポーランド戦ではエースプレーヤーというよりだれもが同じようにプレーしてきて、力でシュートを打たれてたケースが多かった。ディフェンスとコンビを合わせれば恐い攻撃ではないと思いました。しかし、打点の高さでふりきられる恐さは感じられました。

厚い壁に対してのシュートの工夫 ●小池宏子

外国とゲームをする時の共通の思いは、やはり外人は大きいということです。大きいという言葉の中に背だけでなく、横幅や厚みのような感じを含めた方が、もっと正しくイメージを表現することが出来ると思います。今回の世界選手権で対戦した相手の中では、とにかくノルウェーがその大きいという言葉を使うにふさわしいチームであったと思います。その大きな壁を前にすると、ゴールが全然見えなくなる時があるほどで、壁の間から見えるゴールはとても遠く、小さく見えるような気がしま

す。

このような壁に対し、その上からロングシュートを打つということは、まず不可能であるといっていいと思います。実際に入ったロングシュートは、ブラインドをついたものであるとか、身体をかわして間を抜いたというシュートだった事を見ても、それはわかります。自分の場合、ジャンプシュートが多くなるわけですが、長くためた時は自分ではずらしているつもりでも、相手の手の中でとんでいたり、かわそうとしすぎるとバランスがくずれ、シュートが弱く、あまくなり、たたき落される事が多くなります。練習中にもよく言われる事ですが、フォームを小さく、シャープに打つことを心がけ、シュートスピードを増し、ステップシュートも打てるようになりたいと思います。

大きな壁を前にすると、何も出来なかった今大会を大切な思い出の一つにして、次には、少しでも今よりは何か出来るよう努力したいと思います。

アメリカ戦について

●武藤夕起子

世界選手権13～16位決定戦の第2戦目は、アメリカ戦でした。日本は、攻守共に積極的にアメリカに攻め入り、今まで多かった凡ミスも減少し、14対8で前半を終えました。後半に入ってアメリカに連取された場面もありましたが、日本もすぐ取り返し、結局25対20で勝ちました。

アメリカは、ロングシューターが強力なチームなのですが、日本のディフェンスが粘って守ったためにミスが多くなってしまい、力を出し切れずに終わってしまったようです。逆に、日本は前日のポーランド戦で負けてしまったので、心機一転して皆なで力を合わせてやれたのが、勝利に結びついたのだと思います。特にディフェンスの部分では、今回の大会の中では一番良く守れていたと思います。

アメリカとは、昨年4月のジャパンカップ、今年7月ソ連でのグッドウィル大会に続いて3回目なので、比較的戦い易いチームなのですが、アメリカのポイントゲッターで、ゲームメーカーの黒人のサム・ジョーンズ選手が13～16位の決定戦に来る前のゲームで、きき腕である左手を骨折してしまったため、日本とのゲームは出場出来なかったのですが、もし出場していたらまた違うゲーム展開だったと思います。

オランダの印象

●山内香代

世界選手権開催地オランダは、私にとって初めての国でした。オランダといって連想したのは、なんといってもチューリップ、民族衣装、そして風車でした。12月でチューリップは見ることが出来ませんでしたが、球根が花壇いっぱいに植えられているのを見ました。春になると、絵ハガキやパンフレットで見られるような赤や黄色の大きな美しい花を咲かせるのだろうと思います。朝は8時位からやっと明るくなり始めて、夕方5時位には暗くなります。太陽を見るのがマレで、いつもどんよりと曇っているため町全体が暗い雰囲気ですがそれと反比例するように、人々はとても陽気で親切です。

町のほとんどの家の窓辺には、いろんな植物が置かれていて、チューリップに限らず、草花を大切にしているようです。動物も一緒で町中では、犬をつれて散歩している人を多く見かけました。本などで見たことはあったけど、あれほど大きい風車を見たことがなかったので、驚きましたが、周囲の草原と調和してとても素晴らしい景色でした。

通訳の方をはじめ、いろんな方々に笑顔で迎えていただき、大変お世話になりました。

オランダは、世界選手権開催地としての素晴らしい印象だけではなく、風景、自然が美しく、人々の心の暖かい国だと感じています。

世界選手権を終えて

●小深田由紀子

残念ながら今回の遠征では、ビデオを撮る機会が多かったのですが、世界選手権に日本代表として参加し、感じた事をこのビデオという方面からふれてみたいと思います。

世界選手権では、ほとんどの国が、ビデオを撮影していました。

自分の国や対戦相手の試合はもちろん、その他には、自分の国とは一味ちがったプレーをする国、そして世界のハンドボール界のクイーンのプレーを学ぶために、各国のビデオマンが目を光らせてテープに納めていました。

自分たちの試合内容について反省し、対戦相手のプレーをより早く何度も研究出来るという訳で、利用価値が非常に高いのです。

それからビデオ撮りで気づいた事は、選手がビデオを撮っている国が、ほとんどないという事です。ビデオマンがいるというだけではなく、他の国には、通訳・トレーニングドクターなど専門分野の方がいるのに、日本は兼任という形なのです。

広い目で見た時に、必ず専門分野の方が必要になると思いますし、選手がプレーに徹し、チームが盛り上がるためには、出来る事なら、ハンドボール以外の、通訳、ビデオマンなどはいた方が良いと思います。

高校生として初めて世界選手権に参加して

●林　智恵

私は、全日本チームのただ一人の高校生として、初めて世界選手権大会に参加した。国際試合で外国を訪れたのはこれで4度目だが、ヨーロッパは初めてで、オランダの広大な景色、大きな自然にはびっくりした。まるで、本やテレビからそのまま飛び出してきた感じだった。

ヨーロッパの試合では、何もかもが初めてで、驚きの連続だった。まず、試合の始まる時間が遅いこと。高校生はだいたい午前9時から午後5時ぐらいだが、ここでのチェコ戦、中国戦は、午後8時30分だった。また、体格が日本とは比較にならないこと。欧国は皆タテも横も大きく、私なんか小さいくらいだった。そして、ハンドボールの人気のすごいこと。どの会場もたくさんの人でにぎわい、そしてどの国にも、大きな拍手を送っていたのが印象的だった。

私は、チェコ戦、ノルウェー戦でそれぞれ2点得点することが出来た。あのような大きい選手の上から打てたこと、そして、たった1本でもシュートが決まったことはとてもうれしい。一生、私の心に残るだろう。

このような素晴らしい大会に参加することが出来、周囲の方々に感謝するばかりです。本当にありがとうございました。この経験を今後に生かしていきたいと思います。

MIZUNO
THE WORLD OF SPORTS

80 SINCE 1906
ボクら、万有引力とたたかわれる

コンケーブ意匠
ヘリボーン意匠
サイドモーション サポートリブ
ピボットリング
フレキシブルゾーン

パワー効率重視。コートのマシン〈ランバード〉

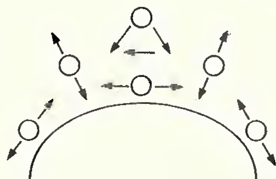
室内コート専用のマルチファンクション ソール。

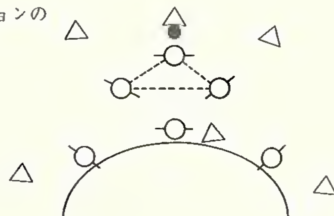
前後左右、あらゆる方向へのトラクション性にすぐれたヘリンボーン意匠をベースに、かかとには着地時の衝撃を吸収、分散するコンケーブ意匠を配置。また、ソール前半にはパワーロスを防ぐサイドモーション サポートリブ、回転運動の軸となるピボットリングをはじめ、屈曲性を高めるフレキシブルゾーンなどをレイアウト。多様なプレーに対応するソールパターンが生まれました。

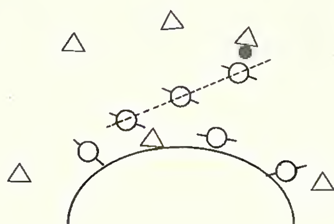
〈ランバード〉ハンドボール シューズ
《ウイング ショット》 ¥12,000
- 甲/牛革 ● 補強材/人工皮革 ● 底/ラバー ハーフシェル ソール
- カラー/16KH-1527 ホワイト・レッドにメタリックネイビー ライン
  /16KH-1562 ホワイトにレッド ライン

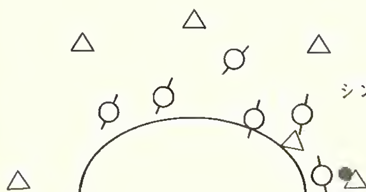


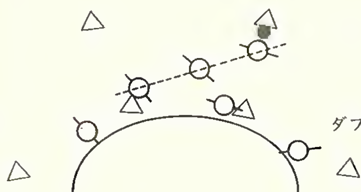
連載③ ユーゴスラビアで学んだこと


1-2-3DFの各ポジションの基本的な動き方






シングルポストの時のDFの動き方


ダブルポストの時のDFの動き方

1―2―3ディフェンスについて

高村誠一

1―2―3ディフェンスは、攻撃的なディフェンスである。相手チームの攻撃のリズムを狂わせると共に、ロングシュートに対してはかなり強い。45度ディフェンスが積極的に前へつめるので、つめた下のスペースがどうしても広くなるが、そこはトップ、センター、逆45度がその空いたスペースをうまくカバーするような位置どりをし、ハンドアップをしながらポストへのパスをカットする。

このように、比較的中央からの攻撃に強いこのディフェンスの弱い点は、サイドである。サイドディフェンスは、広いスペースを守らなければならないので、相手の攻撃の先読みをするなどの工夫が必要である。

1―2―3ディフェンスで、特に大切な事は、できるだけ早くファウルをして、相手のリズムで攻撃されない事である。

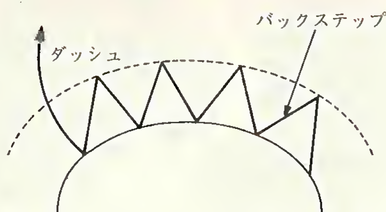
1―2―3ディフェンスをやるためには、次の3つの事が必要だと思う。

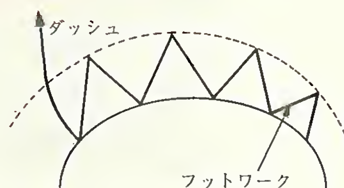
①良いGKがいる事（サイドシュートに強い）。

②全員が速いフットワークができる。

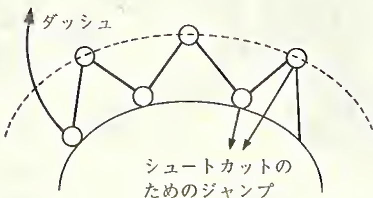
③相手の攻撃の先読みができる。

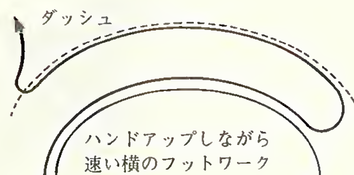
この3つの条件を満たした上で、全員が自分の役割をしっかり果たし、組識的に動くことができたら、このディフェンスはうまくいくと思う。

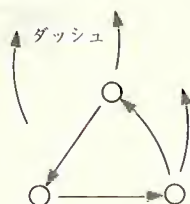




• 常にハンドアップをし、パスカットができるように手を動かす





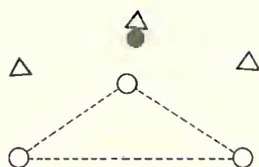


三角形のフットワークをしてダッシュ
（３人ができるだけ速く動く）

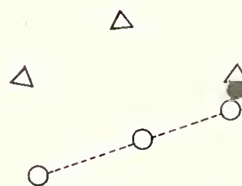


ボールに対して常に全員が正面を向く

◎真中３人の動き方



ボールが中央にある時は三角形を作る



ボールが45°にある時は一直線を作る



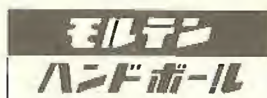


瞬間、
信頼の手がかり!

独自の32面体
ノンスリップ構造で
ダイナミックプレーを演出する
モルテンハンドボール

独特のリブ形状とパネル間段差の"32面体ノンスリップ構造"で確かな手がかりを生み出すとともに、ナイロン糸巻構造をほどこし、すばらしい耐久性、真球性をも実現したモルテンハンドボールは、日本ではじめて国際ハンドボール連盟(I.H.F.)公認を獲得。ハンドボーラーの圧倒的な人気と信頼を集めています。

●日本ハンドボール協会検定球(J.H.A.)  ●国際ハンドボール連盟公認球(I.H.F.)



株式会社モルテン
東京本社　東京都墨田区横川5-5-7 〒130 ☎(03)625-7581
東京・大阪・広島・名古屋・福岡・札幌・ロサンゼルス・デュッセルドルフ

800m²の青春



ねばり強いディフェンス、そして鋭いシュート!800m²のコートにとび散る汗。ハンドボールは、頭脳と技の闘いだ。空間に舞う身体、全身がひとつになりVへのゴールにボールが躍る。ミカサのハンドボールは、優れた弾力性と強度、そして手に吸いつくような感触で全世界のプレーヤーから絶賛を浴びています。勝利を目指す人の、ミカサのハンドボール。

新製品
小学生用軽量ハンドボール



重量265g
検定球
¥3,300



MGH3

MIKASA®
本　社/〒733 広島市西区楠木町3丁目11-2 ☎(082)237-5145㈹
営業所/東京・大阪・名古屋・広島・福岡

帯同審判員として　インテラムニア・カップに参加して

福田英明

5月に国際審判パネルAに合格をし、初めて「インテラムニアカップ」大会出場の全日本ジュニア女子チームの帯同審判員として松尾氏と二人でイタリアのテラモまで7月上旬、11日間の行程に同行をした。私自身海外での吹笛は、全日本学生選手団の一員として韓国で5試合の経験があり、またこの「インテラムニアカップ」は、前々年関西の光島、狩野先生方が吹笛の経験をお持ちなので色々助言をいただけたので、多少なりとも安心をして出発することが出来た。

ローマから3時間半のバスでアドレア海に近い人口6万の都市テラモのミケランゼロホテルに投宿、目前にGRANSASSOが雪をいただき、風光明媚で物静かな町並である。松尾君のバックがローマに着かず、ユニホームが無いので、レフェリングは駄目かも、これは大会見物のみと喜んだが、日本航空ローマ支店の山地氏の御尽力で明朝ホテルに着き、無事レフェリングが出来るようになった。明朝光島先生に聞いていた地図を頼りに大会本部に出かけたが、まったく目的地に着くことが出来ず、警察官にたずねてもはっきりせず、あちらこちら迷った末町を歩いていた若者が車で送ってくれた。目的の場所をはるかにオーバーラップした所まで来ていたのである。

早速受付で日本の審判であるがモンテニウかアントニオ氏に逢いたいと申し出るが、話は全然通じず、自分の語学力の弱さを嘆くのみ、午後訪れることを約束し力無くホテルに引き上げた。再度総務の田川氏に同行をお願いし、色々なスケジュールを知ることが出来たが、我々にとって大切なレフェリーミーティングは、本日の午後9時よりBANCO、NAPOLIの3階で行なわれるとのこと、また、会場をさがすのに苦労するからと明るい間に確かめておいた。定刻田川氏に御同行を願って会場に行くが、ミーティングには通訳は許可しないとのこと、ガッカリすると同時に不安な気持一杯で着席。前方の席にノルウェーのカール・E・ワン氏の顔が見えたので理解できない時は彼に聞けばよしと心構える。イタリア語に始まりフランス語、英語と通訳をしてくれるが、結局ほとんど理解出来ず、審判員は毎朝7時30分ホテルGRAN・SASSOに集合のみ判明した。しかし、各自に配布されたカードに記入しなければならず、困っていると隣りに座っていたイタリアの審判員が英語で説明してくれたので、何とか記入し、カール・E・ワンに見てもらって提出することが出来た。まったくもって心細いかぎりだ。

翌朝GRAN・SASSOに行くと、ゲームナンバー、時刻、会場が記入されたカードが手渡され、見ると連続吹笛で、午前2試合、午後3試合だ。今まで一日にこれだけの吹笛の経験がないから驚くばかりだ。バスで会場迄送ってくれゲーム開始20分前頃到着、会場には選手のみ、オフィシャルはやっと5分前に来てストップウォッチは持っていない。少々頭に来るが、第1試合は無事終了。第2試合中に位置取りが悪かったのが、ベルギーのゴールキーパーとアクシデント両手首捻坐に見舞われる。非常に熱い、温度34℃だ。しかし湿度が低いのが救いだが、ウォームアップから2時間走り続けの計算になる。午後はCAMPO、8に行ってバスに乗らなくてはならず、タクシーで出発。アスファルトで舗装された広場にコートが一面、排水のため斜めになった会場だ。ゲーム中自動車やモーターバイクが入る。そのたびにゲームを中断、陽気な大会だ。帰りは徒歩で30分最後のホテルの坂道が疲れた体にむち打つようだ。

次の日は、午前中3試合のカードを貰ったので、二人で大喜び、昼食は選手団と一緒に日本のゲーム見物を思い、仕度を始めると、呼出があり、2試合吹笛カードを見せられバスで27km離れた会場へ。何処の会場でもボーイスカウトの若者がオフィシャルでストップウォッチ1個のみ。一日平均5試合だと覚悟をしほとんど通じない言葉をジェスチャーでカバーして会場をさがし、国内のような頼になるオフィシャルだとらくだろうと思いつつ明日に向って備える。

すべてのテラモのスケジュールが終ってみると、5日間で22試合のゲームに吹笛であり時間の長短はあれど、すべてが国際試合だから精神的疲労はかなりのものであった。

色々な困難にもぶつかったが、これだけの経験を積むと、吹笛には大変な自信が生まれ、余裕を持って吹笛が出来るようになった。

少々のハードスケジュールでも耐えられる体力と精神力を常に養うことと語学力を高めること、英語の他に独語かフランス語のマスター、これから国際審判として大きくはばたかれる若い日本の審判の方々に語学の研鑚をされることを心から望んでおります。

各地の記録から…

東北

第36回青森県高校秋季選手権
（11月15、16日／野辺地町立体育館、野辺地高校体育館）

〈男子〉

▼1回戦
十和田工 20－14 今別
青森南 33－11 弘前南
青森 37－12 五所川原
野辺地 34－15 鰺ケ沢
三本木 21－12 青森東
野辺地横浜分校 14－8 青森山田

▼2回戦
青森商 28－11 十和田工
青森 25－21 青森南
野辺地 28－15 三本木
野辺地横浜分校 16－13 柏木農

▼準決勝
青森商 21－8 青森
野辺地 21－9 野辺地横浜分校

▼決勝
青森商 20（11－5, 9－8）13 野辺地

〈女子〉

▼1回戦
青森商 13－9 青森中央
三本木 10－7 青森東
青森西 36－1 今別

▼準決勝
野辺地 14－8 青森商
青森西 37－2 三本木

▼3位決定戦
青森商 42－3 三本木

▼決勝
青森西 25（13－10, 12－8）18 野辺地

第30回岩手県高校新人大会
（11月15～17日／花巻北高、花巻農高）

〈男子〉

▼1回戦
福岡 12－0 水沢
盛岡南 24－13 一関工

▼2回戦
花巻北 22－19 福岡
盛岡商 31－17 盛岡三
釜石南 17－9 一関一
盛岡四 25－21 花巻農
生活学園 27－16 久慈
宮古 30－6 福岡工
大迫 17－16 岩手
盛岡一 25－18 盛岡南

▼3回戦
花巻北 20－14 盛岡商
盛岡四 27－16 釜石南
宮古 13－12 生活学園
盛岡一 21－13 大迫

▼準決勝
盛岡四 21－13 花巻北
盛岡一 21－10 宮古

▼決勝
盛岡四 20（10－12, 10－7）19 盛岡一

〈女子〉

▼1回戦
黒沢尻南 13－4 盛岡四

▼2回戦
花巻北 17－3 盛岡南
白百合学園 11－10 宮古
釜石南 19－2 岩手女
花巻南 13－4 水沢
花巻農 12－6 盛岡三
平館 9－6 向中野学園
盛岡二 31－3 一戸

▼2回戦
花巻北 12－3 盛岡南
釜石南 15－3 白百合学園
花巻南 13－5 花巻農
盛岡二 22－1 平館

▼準決勝
花巻北 17－8 釜石南
盛岡二 21－7 花巻南

▼決勝
盛岡二 11（5－4, 6－5）9 花巻北

東海

三重県高校秋季選手権
（11月16、23、24日／四日市市体育館ほか）

〈男子〉

▼1回戦
津西 19－9 四日市西
桑名 26－6 津

▼2回戦
四日市工 43－4 津西
亀山 15－15 桑名工（PTC 4－3）
津東 16－7 尾鷲
桑名西 28－7 日生第一
高田 16－8 四日市中央
海星 24－13 桑名北
四日市南 25－7 津工
四日市 16－8 桑名

▼3回戦
四日市工 27－10 亀山
津東 16－13 桑名西
高田 17－12 海星
四日市 27－14 四日市南

▼準決勝
四日市工 21－10 津東
四日市 18－10 高田

▼3位決定戦
津東 21－12 高田

▼決勝
四日市工 27（15－4, 12－7）11 四日市

〈女子〉

▼1回戦
四日市四郷 12－9 四日市
四日市南 30－3 桑名北
四日市西 12－11 亀山
上野 30－8 津
津東 15－9 尾鷲
桑名 19－16 松阪女
四日市商 37－4 津西

▼2回戦
暁 33－8 四日市四郷
四日市南 17－5 四日市西
津東 19－8 上野
四日市商 32－11 桑名

▼準決勝
暁 20－4 四日市南
津東 14－3 四日市商

▼3位決定戦
四日市商 16－11 四日市南

▼決勝
暁 25（12－3, 13－3）6 津東

北信越

石川県協会会長杯争奪戦
（10月26日、11月2日／北国銀行体育館）

▼1回戦
金沢市役所 15－10 小松クB
県工ク 31－6 松陵ク
小松クA 23－18 星陵ク

▼準決勝
金沢市役所 28－17 県工ク
小松クA 22－19 小松ウェンズディ

▼決勝
金沢市役所 21（12－11, 9－7）18 小松クA

石川県高校新人大会
（11月13日～16日／金沢市総合体育館）

〈男子〉

▼予選リーグ

○A組
金沢市工 21－7 向陽
金沢市工 28－11 羽咋
向陽 22－6 羽咋

○B組
小松工 32－16 錦丘
錦丘 27－22 松陵工
小松工 40－9 松陵工

○C組
寺井 28－10 大聖寺
小松明峰 44－9 大聖寺
小松明峰 32－9 寺井

○D組
星稜 31－14 金沢商
県工 36－18 星稜
県工 50－8 金沢商

○E組
泉丘 22－20 小松商
泉丘 25－14 松任
小松商 28－8 松任

○F組
小松 40－7 金沢
小松 28－12 二水
二水 30－15 金沢

▼決勝トーナメント1回戦
小松 25－10 泉丘
県工 34－18 錦丘

金沢市工 31-13 寺井
小松工 24-12 二水
▼2回戦
小松 25-11 向陽
小松明峰 17-16 県工
星稜 22-20 金沢市工
小松工 40-14 小松商
▼準決勝
小松 13-10 小松明峰
小松工 38-15 星稜
▼決勝
小松工 17 (6-6, 11-8) 14 小松
※小松工は4年連続11回目の優勝

〈女子〉
▼予選リーグ
○G組
小松市女 36-4 寺井
小松商 12-9 小松市女
小松商 40-1 寺井
○H組
松任 25-6 星稜
金沢商 27-3 星稜
金沢商 17-7 松任
▼準決勝
小松商 33-4 松任
小松市女 28-3 金沢商
▼決勝
小松商 7 (4-2, 3-4) 6 小松市女
※小松商は初優勝。

中国

第7回山陰選抜選手権

(11月16日/境港第二市民体育館)

〈一般男子〉
▼1回戦
境港ク 29-14 松江ク
江津ク 19-18 倉吉ク
▼決勝
境港ク 23 (9-12, 14-7) 19 江津ク

〈一般女子〉
▼決勝
松江女子高ク 18 (10-6, 8-7) 13 境港ク

〈高校男子〉
▼決勝
飯南 17 (6-7, 11-8) 15 米子東

〈高校女子〉
▼決勝
松江市女 26 (9-4, 17-6) 10 境

九州

佐賀県高校新人大会

(11月9、16日/神埼農高)

〈男子〉
▼リーグ戦
佐賀農 48-11 佐賀東
神埼 15-9 佐賀西
神埼農 37-4 佐賀東
佐賀農 27-17 佐賀西
神埼農 29-12 神埼
佐賀農 33-17 神埼
神埼 29-10 佐賀農
神埼農 23-20 佐賀東
佐賀西 21-9 佐賀東
神埼農 26-10 佐賀西
[順位] ①神埼農 ②佐賀農 ③神埼 ④佐賀西 ⑤佐賀東

〈女子〉
▼リーグ戦
神埼 12-12 佐賀東
神埼農 18-2 嬉野商
佐賀女 35-1 東松浦
神埼農 17-2 神埼
佐賀女 27-0 嬉野商
佐賀東 28-7 東松浦
神埼 27-5 東松浦
神埼農 19-18 佐賀女
佐賀東 11-6 嬉野商
嬉野商 10-4 東松浦
佐賀女 27-3 神埼
佐賀女 33-5 佐賀東
神埼 15-7 嬉野商
神埼農 32-3 佐賀東
神埼農 34-1 東松浦
[順位] ①神埼農 ②佐賀女 ③神埼 ④佐賀東 ⑤嬉野商 ⑥東松浦

佐賀県中学新人大会

(11月9、16日/神埼農高)

〈男子〉
▼準決勝
千代田 20-14 基山
多久中央 14-12 神埼
▼決勝
多久中央 22 (11-9, 11-11) 20 千代田

〈女子〉
▼準決勝
神埼 16-10 千代田
▼決勝
神埼 26 (11-6, 15-2) 8 多久中央

名地の学生リーグ

東北学生リーグ戦

(10月2~5日/仙台市体育館)

▼男子1部
東北学院大 26-21 岩手大
東北学院大 37-30 仙台大
東北学院大 42-15 福島大
東北学院大 34-25 山形大
東北学院大 40-12 東北大
岩手大 30-20 仙台大
岩手大 26-21 福島大
岩手大 32-22 山形大
岩手大 34-12 東北大
仙台大 36-29 福島大
仙台大 27-17 山形大
仙台大 32-14 東北大
福島大 31-23 山形大
福島大 41-27 東北大
山形大 28-19 東北大
[順位] ①東北学院大 ②岩手大 ③仙台大 ④福島大 ⑤山形大 ⑥東北大

▼男子2部
宮城教育大 33-27 東北福祉大
宮城教育大 30-27 東北学院大工学部
宮城教育大 48-20 日大工学部
宮城教育大 33-25 弘前大
東北福祉大 23-19 東北学院大工学部
東北福祉大 39-25 日大工学部
東北福祉大 25-24 弘前大
東北学院大工学部 30-22 日大工学部
東北学院大工学部 28-24 弘前大
日大工学部 33-22 弘前大
[順位] ①宮城教育大 ②東北福祉大 ③東北学院大工学部 ④日大工学部 ⑤弘前大

▼女子
岩手大 37-17 東北福祉大
岩手大 27-17 山形大
岩手大 31-23 福島大
岩手大 42-4 宮城教育大
山形大 26-21 福島大
山形大 46-7 宮城教育大
福島大 38-5 宮城教育大
[順位] ①岩手大 ②東北福祉大 ③山形大 ④福島大 ⑤宮城教育大

関東学生秋季リーグ戦

(9月20日~10月29日)

▼男子1部
国士大 19 (8-6, 11-10) 16 慶大

日大	25	15-9	10-11	20	筑波大
早大	27	16-13	11-10	23	法大
日体大	20	16-10	4-8	18	中大
早大	32	18-11	14-5	16	中大
法大	23	14-12	9-9	21	日体大
日大	28	16-9	12-10	19	慶大
国士大	25	12-9	13-11	20	筑波大
法大	25	16-10	9-11	21	国士大
日大	26	15-12	11-13	25	中大
早大	31	16-9	15-9	18	慶大
日体大	25	13-11	12-14	25	筑波大
国士大	30	17-12	13-15	27	中大
早大	28	15-9	13-10	19	筑波大
法大	25	12-9	13-10	19	日大
日体大	25	14-6	11-10	16	慶大
中大	23	12-8	11-9	17	慶大
筑波大	24	13-12	11-8	20	法大
日体大	26	12-13	14-12	25	国士大
早大	30	19-11	11-11	22	日大
慶大	22	15-10	7-10	20	法大
筑波大	23	13-10	10-5	15	中大
日大	27	12-12	15-9	21	日体大
早大	29	15-15	14-12	27	国士大
筑波大	29	12-9	17-8	17	慶大
中大	29	19-9	10-10	19	法大
早大	27	16-9	11-14	23	日体大
日大	24	11-10	13-11	21	国士大

［順位］①早稲田大（7勝）②日本大（5勝2敗）③筑波大（3勝3敗1分）④国士舘大（3勝4敗）⑤法政大（3勝4敗）⑥中央大（3勝4敗）⑦日本体育大（2勝4敗1分）⑧慶応大（1勝6敗）

▼女子1部（9月20日～10月25日）

日体大	22	10-8	12-8	16	日女体大
東女体大	34	18-4	16-6	10	東海大
筑波大	30	14-2	16-5	7	東学大
日体大	26	13-8	13-12	20	日女体大
筑波大	43	21-7	22-6	13	東学大
東女体大	39	18-4	21-1	5	東海大
日体大	32	17-5	15-11	16	東海大
筑波大	29	12-8	17-2	10	日女体大
東女体大	34	19-10	15-10	20	東学大
日体大	31	16-4	15-6	10	東海大
筑波大	22	17-7	15-10	17	日女体大
東女体大	38	17-5	21-8	13	東学大
東学大	20	11-8	9-4	12	東海大
東女体大	34	17-6	17-5	11	日女体大
筑波大	23	10-3	13-12	15	日体大
東海大	19	11-4	8-3	7	東学大
東女体大	30	16-7	14-6	13	日女体大
日体大	19	9-11	10-7	18	筑波大
筑波大	24	13-4	11-2	6	東海大
日女体大	23	12-8	11-7	15	東学大
東女体大	27	17-9	10-11	20	日体大
筑波大	19	8-2	11-4	6	東海大
日女体大	23	9-5	14-4	9	東学大
東女体大	32	17-10	15-7	17	日体大
日女体大	22	11-4	11-9	13	東海大
日体大	21	9-4	12-4	8	東学大
筑波大	24	10-10	14-7	17	東女体大
日女体大	17	7-9	10-7	16	東海大
日体大	31	19-10	12-9	19	東学大
東女体大	26	11-7	15-11	18	筑波大

［順位］①東京女子体育大（9勝1敗）②筑波大（8勝2敗）③日本体育大（7勝3敗）④日本女子体育大（4勝6敗）⑤東海大（1勝9敗）⑥東京学芸大（1勝9敗）

東海学生秋季リーグ

▼男子1部

名学大	29	16-16	13-12	28	名城大
中京大	27	16-7	11-9	16	愛教大
中京大	41	20-12	21-8	20	名学大
中部大	31	15-13	16-11	24	愛学大
愛教大	21	11-7	10-10	17	名学大
中京大	38	21-10	17-9	19	愛学大
中部大	35	17-13	18-13	26	名学大
愛学大	28	18-12	10-12	24	愛教大
中部大	33	19-9	14-5	14	名城大
中京大	26	15-9	11-8	17	名城大
中部大	35	17-8	18-10	18	愛教大
愛学大	39	22-14	17-14	28	名学大
愛教大	32	18-13	14-18	31	名学大
愛学大	21	12-7	9-13	20	名城大
中京大	24	12-10	12-10	20	中部大

［順位］①中京大（5勝）②中部大（4勝1敗）③愛知学院大（3勝2敗）④愛知教育大（2勝3敗）⑤名古屋学院大（1勝4敗）⑥名城大（5敗）

▼女子1部

愛教大	24	13-10	11-5	15	中京大
中京女大	32	16-3	16-2	5	三重大
中京大	40	24-7	16-0	7	三重大
中京女大	23	12-10	11-6	16	愛教大
愛教大	28	13-5	15-3	8	三重大
中京女大	26	16-10	10-5	15	中京大
中京大	16	9-7	7-5	12	愛教大
中京女大	37	15-4	22-1	5	三重大
中京大	21	10-10	11-10	20	中京女大
愛教大	35	18-6	17-2	8	三重大
中京大	27	12-5	15-6	11	三重大
中京女大	21	11-9	10-5	14	愛教大

［順位］①中京女子大（5勝1敗）②中京大（4勝2敗）③愛知教育大（3勝3敗）④三重大（4敗）



高度なスカイプレーが変幻自在。

スカイハンド®スペシャル (THH705)

- ●カラー　ホワイト×レッド・レッド×ホワイト・ロイヤルブルー×ホワイト
- ●サイズ　22.5～28.0cm
- ●アッパー　ステア表革(ホワイト×レッド)
  牛革ベロア(レッド×ホワイト、ロイヤルブルー×ホワイト)

標準小売価格 ¥13,000

ASICS TIGER

襲う。

ストップ&ジャンプ性能を徹底追求したシューズ、〈スカイハンド®スペシャル〉。つま先からかかとまで衝撃吸収性に富む超軽量スポンジE・V・A・を内蔵したカップソールが、素晴しい軽さ、ソフトな着地感、ストップ性を獲得しました。アクロバチックなスカイプレイを繰り広げながら、ヒッチコックの「鳥」のような圧倒的迫力でゴールを襲うハンドボーラーに捧げます。

株式会社アシックス

(財)日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』
第二五九号
昭和四十年六月七 第三種郵便物認可
昭和六十一年一月二十五日 印刷
昭和六十一年二月一日 発行
東京都渋谷 一―一―一
電話 代表 二三―六一
振替 東京 六―五八三四八番
編集兼発行人 大野金一
定価三百五拾円
（年間購読料三千三百円）

